
ヒーロー × アニメ物語

ジュネッスインフィニティー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒーロー×アニメ物語

【NZコード】

N8413W

【作者名】

ジュネッシュインフィニティ

【あらすじ】

これは新たなる光と仮面の戦士達のリメイクです。

天ノ川学院、通称天学、この学校は生徒達の個性を大事にする学校であり一筋縄では行かない生徒ばかりである。

この学校に三人の転校生がやってくる、一人は熱血、一人は不思議ちゃん、一人は喧嘩っぱらい、さてさてこれからどうなってしまうのか……

プロローグ（前書き）

リメイクです、間違えて短編になつてた、短編から連載に変えれないなんてめんどうくさ。

プロローグ

ここは風都にあるとある学校、天ノ川学院、この学校は小学、中学、高校とエスカレーター式の学校であり生徒の個性を大切にするため一筋縄では行かない個性的な生徒ばかりである。

天小、天中、天高と各部によつて呼び方が異なる場合もあるがほとんどは天学と呼ばれるとも。

お金持ち、アメフト部、野球部、科学部、オカルト、探偵、貧乏執事、魔法少女、スイッチを持つもの。

今回この学校の高校一年に三人の転校生が来る事になつていた。

運命の出来事（前書き）

この話はリメイク前の物に色々付け加えたものです。
魔弾組と剣組が変更になります。

ちょっと出したいのがあります。

後、1月の設定ですがもうハヤテとヒナギクは付き合っている事に、
あまりここは突っ込まないで頂けると幸いです。

1月のある日、天学へ登校中の生徒達。

「寝過ごした寝過ごした～！」

た。
そして一人、寝過ぎしマウンテンバイクに乗り駆ける金髪の男が居

名前は川雲力不^ミ 天高の一年生である

一人叫びながらひたすら必死になりペダルを漕ぐ。

そして橋を渡る三どししたらその上は一人の男女が居て女子生徒が手紙を男子生徒に渡すが。

つ
た。

(おいおい、読まないで、しかも目の前で捨てるなよな)

頭の中でその男子生徒を非難しながら橋を通り過ぎていった。

「お待てよ！」

誰かがその手紙を捨てた男子生徒に話しかける、男女共に青を基準にしたブレザーの制服を着ているがその話しかけた誰かは黒い学ランでリーゼントと昔なヤンキーの格好をしていた。

「女からの手紙を読まないで捨てるなんて許せねえ！
「時間の無駄だからな、僕は行かせてもらひ」

ブレザーの男子生徒はそのまま去ろうとしたが川に捨てられた手紙を拾おうと違うブレザーの男子生徒が川に降りるとすぐに手紙を見つけて。

「ありましたありましたー！
手紙ありましたー！」

その生徒は茶髪で真面田そうな男子で、手紙を拾つと壁を登り橋に立つた。

「これ、落としましたよね？」

その発言に「ハツ！？」となつた、捨てたのに落としたってどんなだけだと思ったのだろう。

「せつかくの手紙なんですから大事にしないと」

手紙を捨てた男子生徒は呆気を取られ手紙を受け取ると歩き学校へ向かつた。

「さて僕も、じゃあまたお会いしましょー！」

手紙を拾つた男子生徒は走り去つていつた。

「なんだあいつ？面白え奴だな」

学ランの男子生徒も学校へ、三人共同じ方向へ進んでいた。

「いやーー！遅刻だ遅刻！」

すると次に橋を渡ろうとしていたのは茶髪でサイドテールの女子生徒、高町なのはだつた。

「飛んでいいかなレイジングハート！？」
【ダメですマスター】

なのはが話しているのは『デバイスと呼ばれるアイテムで赤い宝石のレイジングハート・エクセリオン、デバイスは魔導士と呼ばれる魔法使いが使うものでなのはも魔法使いだつた。

「飛ばしてよーー！」

【ダメです】

レイジングハートはダメですの一点張りで許可しなかつた、魔導士の姿になるには社会人なら自分の意志、学生なら『デバイスの許可がないとなれないのだ。

天子は生徒の個性を大事にしているため飛んでもいいのだがレイジングハートはそれではなのはのためにならないと思い許可しなかつた。

【だいたいマスターが一度寝るのが悪いんですよ~】

「だつて朝弱いんだもん！」

【理由になりません】

厳しいレイジングハートさん。

「なのはお先に~！」

すると隣を金髪の長い髪の毛の女子生徒、フェイト・テスター・ロッサがオレンジの毛の大型の狼、アルフに乗り通り越した。

「フェイトちゃんのアレはいいの~!~?

【使い魔がいいならいいです】

理不尽な答えが返ってきた。

天高のとある教室ではお嬢様と執事と生徒会長がもめていた。

「だからハヤテくんは私のものなの~!~

「だが私の執事もあるんだ!~!~

「まあまあ落ち着きましょ~うよふた」「うるせー!~ハヤテ(くそ)は黙つて(う)ー」「はあ……」

喋つきたつとしたが最後まで喋れなく溜め息をついたのは水色の髪の毛で空色の瞳で女の子の顔だがれつとした男の子のマドカ・ハヤテ。

喧嘩しているのはハヤテをくん付けで呼んでいるのは桃色のロングヘアーで金色のヘアピンで止めていて瞳も金色で胸が可哀想なのは桂ヒナギク、ハヤテの彼女。

もう一人は金髪のツインテールで緑色の瞳で背がちっこいのは三学院ナギ、ハヤテはナギの執事である。

(このお二人は本当にもう困ったものですね)

そつ思つていてると。

「ちよつとヒナギク、ナギ、落ちつこつよ

「「フュイト！」」

そこにフュイトが喧嘩を止めに入つた。

「ハヤテが困つてゐるよ」

「そ、 そうなのだが」

「た、 確かにそうよね、『めん、ハヤテくん』

「いえ、 良いんですよ」

ハヤテは氣にしていなかつた。

「あつがとうござりますフュイトさん」

ハヤテは基本女性は苗字で呼ぶことが多いがフュイトは名前だった。

「ここここの」

「この4人は高校一年生であるがナギは飛び級生である。

「そう言えば今日このクラスに転校生来るみたいね」「そうなの？」

「うん、お姉ちゃんと風見先生にジョイル先生達が話してた、それに私のクラスにも来るみたいだし」「

ヒナギクはこの3人とは違うクラス。

お姉ちゃんとは実の姉で世界史担当の桂雪路の」と、風見先生とは中等部の科学担当の風見志郎でジョイルとは高等部の科学担当のジエイル・スカリエッティのこと。

「冬休みが終わってすぐに今日だけで一気に3人も来るとはな」

ナギの言つ通り冬休み終わった後であり新学期が始まるのだ。

「それもそうよね」

すると……

「ヒナちゃん、そろそろHR始まるよ~」

「分かった~! なのはは先に教室戻つてて」

話し掛けたのはなのはでヒナギクとは同じクラスである、ギリギリ間に合つたようで息が切れている様子。

「分かつた~じゃあ先に戻つてるね、じゃあねフエイトちゃん」「また後でねなのは」

なのはとフュイトは親友で後もう1人ハ神はやてと言つ少女も居るが先に自分の教室に戻っていた。

ハヤテと同じ名前ためヒナギクはハヤテくんと呼んでいてナギはハ神、ハヤテはハ神さん、フェイトはハヤテとはやて両方同じで呼ぶがどっちを呼んでいるかなぜか解る。

ヒナギクは自分の教室に戻りハヤテ達は自分達の席に座った。

「では今日は転校生が来てるよー」

テンション高いのはヒナギクの姉でこのクラスの副担任の桂雪路。

「んじゃ入つてー」

ガラガラーとスライド式のドアを開けて転校生が入ってきた、入ってきたのは橋で少し揉めていた眞面目そうな男子生徒だった。

「そんじゃ名前言つてー」

「はい！輝未来です！よろしくお願ひしますーー！」

少年の名前は輝未来、未来は元気良くて自己紹介をした。

「それじゃ輝くんはテスタロッサさんの隣の席ね

「はい！」

未来はそう指示されるとさつきみたいに元気良くて大きな声で返事してフュイトの隣の席に座る。

「よろしくね、私フェイト・テスタロッサ」

「よろしくお願ひしますテスタロッサさん」

「フュイトで良いよ、私も未来つて呼ぶから」「はい！よろしくお願ひしますフュイトちゃん」「解らない事があつたら何でも聞いてね」「

フュイトは笑顔を交えてそつまつと。

「は、はい……／＼／＼／＼

未来の顔は赤くなつた。

ヒナギクとなのはの教室では。

「みんなは知つているかもしれないが転校生が居るよ」

「JINの担任のジェイル・スカリエッティ、天才だが生徒のほとんどに変態と呼ばれている。

「誰か変態つて言つた！？」

生徒から引かれたため咳をして「とりあえず『氣を取り直して、入つてくれ』と言うとまたガラガラ～とスライド式のドアが開き髪の毛が青で瞳が赤の男子生徒が入ってきた。

「では自己紹介を」

「風森零斗、よろしくお願ひします」

名前は風森零斗、ハヤテ達のクラスの未来よりは素つ氣なく自己紹介し。

「では君は高町くんの隣の席に座つてくれ」「はい」

零斗は言われた通りに指示された席に座り。

「私、高町なのは、よろしくね」

フェイドと同じように笑顔を交えてなのはは自己紹介した。

「あ…………あよろしく／＼／＼／＼」

零斗は顔が赤くなっているのを隠すように横を向いた。

「どうしたの？」

「べ、別に…………／＼／＼／＼」

そして未来と零斗は……

（（か、可愛い…………））

同じ考えを持っていた。

別のクラスでは……

「転校生が来ているで～」

そのクラスの担任で金髪の女性教師、黒井ななこが転校生を紹介しようとしていた。

その転校生が入ってくると先ほど橋で揉めていた男子生徒だった。

「ほな黒板に自分の名前書いて自己紹介してなー」

男子生徒は黒板に大きく字を書く。

「水月みづつきげんただ、俺の夢はこの学校全員の生徒と友達になることだ！」

名前は水月げんたと言いその自己紹介に引く者も居たが一人だけ。

「もしかしてげんちゃん！？」

「その小さい背にアホ毛はこなたか！」

そこで声を上げたのは青く長い髪の毛で縁の瞳で背が低く高校生なのか疑うがれつきとした高校生の泉こなただつた。

「うわあ～酷～い」

げんたはこなたの近くまで行き一人は拳を上下にぶつけ合いそして最後に拳を前に出してぶつけるという挨拶的な行動をする。

「小学三年ぶりだね！」

友達百人つくるのが夢だったよね

「今じゃ千人だぜ！」

そんなこなたもまだアニメや宇宙好きのか？

「もち「ースだよ！」

旧友の一人が再会を喜んでいるとげんたは後ろに居た男子生徒に目が入る。

「あーっ！お前今朝の！」

「君が転校生だったのか」

それは橋で揉めていた生徒で名前は歌星けんじ。

「女の手紙を読まずに捨てるなんて氣に入らねーな、だから俺はお前とダチになる」

「何言ひてるんだ」と呆れるけんじだが。

「ちよつとひ、ホームルーム進めさせとえなあ」

ななこのその言葉によりホームルームは再開されげんたは自分の席に座った。

その頃、房総半島沖に設置されてある時空防衛軍訳してSTDF所属の防衛チームGUTSの極東基地ダイブハンガーの指令室では。

「みんな、今日から新しく入る隊員を紹介するわ」

そこにはGUTSの女性隊長のイルマ・メグミが隊員達に呼び掛けていた。

「新人隊員ですか？」

一番に反応したの隊員の1人のシンジヨウ・テツオ、GUTSのヒスピヨウト。

「これで7人揃うんや」

次にホリイ・マサミ、主に新兵器の開発や現場に出て物質の解析を担当。

「そうですね！楽しみです！」

オペレーターのヤズミ・ジュン。

「そうね、貴方にも後輩ができるけど年上かもしねないわよ
「た、確かに」

ヤズミの言葉に突っ込んだのはコイシカワ・ミズキ、シンジョウに並ぶエースパイロット。

「隊長、連れてきました」

そこに新人隊員を連れて指令室に入ってきたのはベテランのムナカタ・セイイチ副隊長で……

「それじゃ自己紹介して」

「はいートウマ・カイトです！よろしくお願ひします！」

彼の名前はトウマ・カイト、今回の入隊試験で合格して入隊したボランティア上がりの隊員だ。

「貴方はあの時の」

「貴女は火山噴火の時の」

カイトとミズキは面識があつた。

未来、零斗、げんた、カイトがフェイト、なのは、こなた、ミズキと出会いで始まる様々な物語がこれから始まるのだった……

ヒーロー×アニメ物語

始まります

運命の出来事（後書き）

次回予告はなしで行こうかと思います。
取り敢えず次回は見た事あるかも知れないですが。

未来は無限大（メヒウス）－（前書き）

これはあまり変更点がないので白皇の部分を天学か天高にして投稿します。

もし白皇の文字を見つけたら報告をよろしくお願いします。

未来は無限大（メビウス）！

未来と零斗、げんたが天高に転校してから三日が経った。

（今日で三日目、何も起ららずに時間が過ぎたな……）

早朝、未来は海鳴市と並ぶ街からバスで学校へ向かおうとしてバス停に並んでいた。

「あ、未来」

「フロイトちゃんにアリシアちゃん、それに雷羽ちゃん」

そこにフロイトと少し背が低いが姉のアリシア・テスター口ッサ、そして2人は金髪だが水色の髪の毛で一応三つ子の妹の雷羽・テスター口ッサがやって来た。

「おはよう未来」

「未来おはよう」

「おはよう」やること、アリシアちゃん、雷羽ちゃん

「おはよう、未来」

「おはよう……」やります、フロイトちゃん

フロイトに挨拶されると顔を赤くする未来。

「どーしたの未来？」

雷羽は未来の下から覗き込むように見上げる。

「なな、何でもないよー。」

「ふーん」

「転校してきてから」）「どう良く会うけど未来も海鳴市に住んでるの？」

？」

「うん、そうだよ」

「どこに家が在るの？」

「この街の中心にあるマンションの四階に住んでるよ」

「この街の中心って僕達と一緒にじゃん！」

「そうなの雷羽ちゃん！？」

「そうだよ」

「（近所さんなんだね）未来の部屋は」

自分達が住んでいる所を話していたらバスが来てそれに乗り込みまだ誰も座っていない後ろの席に、アリシア、フェイト、未来、雷羽の順で座ると回りの白皇の男子生徒の殺気が込められた視線が全部未来に向く。

（何でみんなそんなに怖い目で見るのかな？）

未来はなぜ怖い目で見られているのかが解っていらない様子なので説明しましょう。

テスタロッサ姉妹は天ノ川学院で生徒会長のヒナギクと並ぶ人気を持った女子生徒でそんな3人といきなり仲良くなつたため未来にテスタロッサ姉妹派の男子生徒の敵意がほとんど向いている状態。

（（（みんな怖いよ～）））

3人は自分達がそんなに人気があるのを自覚していないから殺気の理由が解らない。

そして、このバスが出発した後にバス停にはまた人が並び今度は零

斗が並んでいた。

「零斗くへん、おはよつ」

「お、おはよう、なのな」

そこに今度はなのはと一応親戚と云ひ事になつて、いの髪の毛が栗色でシートへーターの高町星奈がやつて來た。

「おはよひゞやれこます、風森」

「おはよつ、セイナ」

「良く会つね、ビニに住んでるの?」

やつも未来にフュイト達が質問したみたいになのはも住んでる所を聞いてみた。

「IJの街の中心に在るマンションの四階」

「雷羽達と一緒にですね」

「やうなの?」

「うん、そうだよ」

そこにはバスが到着、乗り込みまた後ろに席に零斗が二人に囲まれるよつに座る。

(なんだこの殺氣?)

やはりなのはと星奈も人氣があるため高町派の男子生徒達に睨まれるはめになる。

(何でみんなこんなに怖い目してゐるのかな?)

(解りません)

2人は念話と呼ばれるもので声に出さず会話する、やはり2人も自覚していなかつた。

そして先に発車した未来達が乗ったバスは天高の近くのバス停に到着し、降りて歩きで学校へ向かう。

(あれ? またみんなこっち見てる)

バスから降りれば学校へ向かう生徒達も多くなるため未来へ向けられる殺氣が多くなるのも無理がない。

「あ、未来くん達」「ハートくん、お姉ちゃん、二人揃はず

一
絶世の才、二才の
「

そこで1人で学校へ向かうハヤテと会い挨拶すると。

ギロツ!

（また怖い目で見てる）

ハヤテにも殺氣が向けられる、理由は天高で人気のあるヒナギクと付き合ってるからハヤテに向けられる殺氣は未来よりすごい。

そこ

「ハヤテくん！」

「あ、おせんべいやれこせんナギクれん」

「輝くんとフロイト達もおまよひ」

「お世話になります、お嬢様」

ヒナギクも来て挨拶する。

「ナギは？」

「あたしA B C R H です」

「何で」

「私も気になつた」

三〇
かくし・シカなし二
れ

ヒナギケは呆れたようにそう語る。

「まあハヤテくんが連れてこれなかつたのは今日は本当に行きたが
つてない証拠だし」

めた。

その教室に入つた。

その頃、宇宙では

「ギシャアアアアアツ！――――――――！」

メタリックブルーの硬い皮膚に長いムチ状の一本の尻尾に長い首に

赤い四つの細長い目に胸には赤く光る発光体が目みたいに四つある
宇宙斬鉄怪獣、ディノゾールが地球を目指し飛行していた。

ショーン！スパン！

ディノゾールは田の前に漂う小惑星や隕石を細長い舌・断層スクリーピテイザーを超高速で振り回し真っ一つに切り裂き自分が進む道を切り開いていく。

「地球へ宇宙怪獣が向かってる？」

ダイブハンガーの指令室ではディノゾールが向かっていると解りヤズミが報告していた。

「はい、過去のデータがない初めての怪獣です
「新たに現れた怪獣か……」

ムナカタは腕を組みそつ弦ぐ。

「宇宙ステーションから送られてきた映像です

モニターにディノゾールの画像が映し出される。

「総本部はこの怪獣のレジストコードを宇宙斬鉄怪獣、ディノゾールと命名しました、武器は先ほど小惑星を破壊したと報告があり口から放たれる舌、断層スクリーピテイザー、

背中や様々な皮膚の隙間から放たれる流体焼夷弾融合ハイドロプロバルサーです」

「ヤズミ隊員、ディノゾールは後どれくらいで地球に到着する?」

「早くて三時間、遅くて四時間です」

それから一時間半が経ち天高では、四時間目の授業が終わり昼休みとなっていた。

そして屋上。

(今日は1人で食事か~)

そこにハヤテがやって来た。

(お嬢様は引きこもりだしヒナギクさんは生徒会の仕事)

ハヤテが思っている通りナギはざる休み、ヒナギクは生徒会の仕事をしているため1人で食事をする事になり屋上へやって来た。

(まあ……慣れてるからいいけど)

ハヤテは産まれた頃から両親が賭事ばっかやって借金作って転校する事が多かった、

それと同時にハヤテと友達にはなってはいけないとかも言われていたので1人で食事をする事が多かった。

(あの2人はちゃんと逃げてるかな?葵とユウキは一億五千万の借金押し付けられて以来会つてないからな。……兄さんは……どこに居るかは解らないけど)

ハヤテには兄弟が居る、2人と言つたが兄がいる、だが行方不明、葵は妹、ユウキは弟で一億五千万の借金押し付けられてから消息が掴めていない。

(せめて葵とユウキだけでも見つけないと、あの子達はまだ小学生なんだ)

ハヤテは握り拳を作り妹を絶対見付けると誓つ。

(だけど……葵は超能力使えるからビビにでも行けるんだよな~見付けられるのか?)

誓つたもののハヤテはだんだんと不安になつていぐ。

(だけど見つけなきや! 3人で一緒にまた暮らしたいしヒナギクさんにも紹介したいから!)

ハヤテは再び決意を固めると。

(自信を付けるためにこれを言おう!)

ハヤテはフェンスの近くまでより一回深呼吸する、そして。

「ウルトラ五つの誓い!

一つ、腹ペコのまま学校へ行かぬこと!

一つ、天気のいい日に布団干すこと!

~

ハヤテがウルトラ五つの誓いと叫ぶのを叫んでいると時計塔の最上階にある生徒会室にまで聞こえてくる。

「一つ、道に歩く時には車に気を付ける」と。

（ハヤテくんまたウルトラ五つの誓い叫んでる、何かの決意を固めたのかな？）

ヒナギクの思った通りだった。

そしてハヤテが四つ目を言おうとした。

「一つ、他人の力を頼りにしない」と。

ハヤテは誰も居ないと思っていたのでビックリし後ろを向くと未来が居た。

「一つ、土の上を裸足で走り回って遊ぶこと。」「

最後は2人同時に叫ぶ。

「驚きました、この言葉を知っている人が居たなんて」

ハヤテは未来の隣まで歩く。

「この言葉は昔ウルトラマンが残したものと
「そうみたいですね」

未来も誰かに教えてもらったと言つよつた感じでハヤテと話す。

「どうしたんですか？ハヤテくん、あんな大きな声で叫ぶ方だけは思わなかつたんですが？」

「ちょっと、妹と弟の事を考えまして」
「妹と弟？」

ハヤテは自分の兄弟となぜナギの執事になるまでの系列を話した。

「そんな大変な事が……」

「はい」

「だけどそれをハヤテくん、何で転校して三日しか経たない僕に話してくれたんですか？」

「さあ、何ででしょ？？」

ハヤテは屈託のない笑顔でそう言つと突如ウイーンー警報が鳴り響く。

「IJの警報は！？」

「怪獣警報！うわっ！？」

すると白皇学院の真上をデイノゾールが通過するとGUTSの戦闘機のガツツウイング1号が一機とガツツウイング2号がそれを追い通過する。

「GUTS！」

ガツツウイングは機首から緑色のレーザーを連射するがデイノゾールには効いていなかつた。

「何で硬なんだ！」

「さすが宇宙怪獣と言つ所だな」

「一機ある1号にはカイトとシンジヨウ、2号にはムナカタとミズキとホリイが搭乗していた。」

「しかも市街地に入つてもうた！」

「迂闊には攻撃できない……各機、市街地に被害が及ばないよう攻撃せよ」

「「「「「了解！」」」」

ムナカタの指示に了解と答えるカイトとミズキ達は地上に降りたテイノゾールに攻撃を開始した。

「「」んな落ち着いた昼下がりに何で怪獣がつて、未来くんー？」

ハヤテが後ろを向くと未来は居なかつた。

「未来くんー？」

校内は悲鳴が響き渡つていた、怪獣が現れた事により生徒達は混乱していた。

「落ち着いて！みんな焦らないで避難して！」

生徒達を避難誘導する教師の面々だが声が届いていなかつた。

「ダメか……！」

「スカリエット先生！」

「やはり彼女じゃないと……。」

あると。

【皆わんー聞いて下せい、生徒会長の桂ヒナギクです】

そこに校内全域にヒナギクの声がスピーカーで響き渡り生徒達は足を止めて耳を傾ける。

【怪獣が出現しましたが落ち着いてゆっくり歩いて避難してください、今GUTSが怪獣と戦って時間を稼いでいますが十分に時間があります】

すると生徒達は落ち着きを取り戻しゅくじと歩き避難を始める。

「さすがこの学校の生徒会長」

「自分の妹ながらさすがね」

雪路とジエイルは感心して「一気に避難を完了」。

「何とかなったわね」

「さすがヒナ、この学校の教師より役に立つな

と言つたのは花菱美希と言つた女子生徒だった。

「後は怪獣を倒してくれれば」

「私達も避難するか」

「そうね」

ヒナギクと美希は放送室から出て避難をした。

その頃ハヤテは突然消えた未来を探しに誰も居ない校内を走っていました。

「未来くーん！ど！」に居るんですか――！？」

ハヤテは未来の名前を呼びながら走り回る。

「あんな一瞬でどう……もしかして未来くんもテレビーター！？」

今の考えを棄ててハヤテは外に出る、敷地を出たすぐそこにはティノゾールとGUTSが戦闘中だった。

「あんな近くにまで……」「……」

「ハヤト! 」

そこに黒い服で白いマントみたいなのがかけ髪型がツインテールでデバイスと呼ばれ鎌に似ているバルディッシュ・アサルトと呼ぶ物を握ったフェイドがやつて来た。

「ハヤテ、まだ避難してなかつたの？」
「未来くんを探していたので」

「未来を？」

一
はい

「あ、未来も大事だけど今から防衛軍、結界張るから早く避難して！」

「解りました！」

ハヤテはそう言われ自分も避難する。

「それにしても未来はどう」……あ！」

するとアモイの田に未来が走っているのが見えた。

一
未
來
！
」

アエロイトは未来を遡難せよ」と飛んで向かふ

「怪獣がもう現れるなんて……！」

未来は何かを決意し左手を拳にし、拳が上に向くように曲げると赤い腕輪のようなアイテム・メビウスブレスを出す。

シユーン！

未来はそのメビウスブレスの中心に埋められている丸く赤いコア・クリスタルサークルを右手で思い切り回し体を左に大きく捻り。

「メビウウウウウス！…！…！…！…！」

そして左腕を頭上高く上げるとメビウスブレスから金色の光が放たれ未来を包み込む。

「未来！？」

そこにひょいひょいフロイトがやつて来て未来を包んでいた光は空に浮かび光の粒子がパラパラ落ちると銀色と赤の巨人が地上に降り立つ。

「嘘……」

巨人の体と頭部にに流れる赤いラインに胸の菱形の青く輝くクリスタル・カラー・タイムマークが付いており乳白色に輝く目に左腕にはメビウスブレスが着いていた。

「リーダー！ あれはもしかして……」
「ウルトラマン！」

そう、それは地球をいくどなく救つてきた我らがヒーローと同じ存在のウルトラマンメビウスが降臨した！

「セアツ！！」

メビウスは右腕を伸ばし左腕を拳が上に向くように曲げるファイティングポーズを取ると走り出しティノゾールに戦いを挑む。

「ウルトラマン……あれが！」
「確かにコスモス以来だよな？」
「せや、6年前にウルトラマンコスモスが地球にやつて来ておるから」
「各機、ウルトラマンを援護する！」

GUTSはメビウスを援護する事にしてティノゾールを攻撃する。

(GUTSの畠たは町に被害が出ないように戦っていた、どうすれば……。)

メビウスはさつきのGUTSの戦いを見て町に被害が出ないように戦っていたため自分も迂闊には大技が出せないでいた。

(大丈夫だよ、すぐに結界張るから安心して戦つて、未来)
(えつ！？)

念話で話し掛けられたメビウスは後ろを向くとそこにはフュイトが飛んでいた。

(フュイトちやん！)

フェイトはメビウスにウインクするとガッシュウイングやディノゾールも巻き込み天学一帯は結界と言つ空間に包み込まれた。

(結界が壊れない限りここなら町に被害は出ないから思い切つて戦つて！)

(うん！)

メビウスはさっきのとは違う左腕の拳を前に向けるように曲げるファイティングポーズを取ると再び走り出しディノゾールの腹部に思いつきりキックを繰り出しそれを蹴り飛ばす、ディノゾールは大きいビルに激突し建物は崩れるが現実空間ではないため被害はゼロである。

「ショアツ！」

次に長い首に掴みかかりパンチしていく。

「ギシャアアアアアツ！－！－！」

「ディアツ－？」「

メビウスはディノゾールの身体から放たれたハイドロプロバルサーで吹き飛ばされ、それを連発されて危機に陥る。

「ディア……！」

ピゴンペゴンペゴン

メビウスの胸のカラータイマーは青から赤に点滅し始め戦える時間が残りわずかになる。

「ギシャアアアアアア－！－！－！」

ディノゾールは断層スクープティザーで更に追い討ちをかける。

「ウルトラマンを援護せよ！」「

ガツツウイングは一斉にレーザーを連射しディノゾールを攻撃。

「プラズマランサー、ファイヤー！」「

フェイトは射撃魔法と呼ばれる種類で金色の魔力弾を連射するプラズマランサーを放ちメビウスを援護する。

「今だウルトラマン！」「

カイトがそう叫ぶとメビウスは立ち上がり、ディノゾールが放った断層スクリューテイザーを両手で掴むと。

「バルデイツシユ、サイズフォーム！」

【サイズフォーム】

バルデイツシユはサイズフォームと言う鎌状の光の刃が現れ、フェイトはそれで舌を切り、ディノゾールは攻撃の手段を失う。

「ハツ！」

メビウスはメビウスブレスのクリスタルサークルを回し両手を広げ、ゆっくりと上に動かすと金色に輝くマークが何個か現れ、両手のひらに金色のエネルギーが貯まると。

「シェアアアアアツ！……！」

メビウスは最後に腕を十字に組み、必殺技の金色に輝く光線メビュームシユートを発射し、ディノゾールに当てる。

「ギシャアアアアツ！……！」

光線が止まると、ディノゾールは断末魔を上げぐつたりと倒れ、目に光が失うと絶命、それと同時に結界は解除され、壊されたビルは元に戻り現実空間に戻る。

「シェアツ！」

メビウスは両手を広げ飛び立ち、大空へ消えたのだった。

「未来が…………ウルトラマン…………」

フュイトは天高の屋上に降りるとそこには光の球にがやつて来て未来が現れる。

「フュイトちゃん…………」

「未来…………君は…………」

「僕は…………見ての通りウルトラマン、ウルトラマンメビウス」

「メビウス、それが君の本当の名前?」

未来は「うん」と頷く。

「だけどこの星じゃ」

「輝未来、その姿じや輝未来何だから気にしなくてもいいよ、未来がウルトラマンだつて事誰にも話さないから」

「フュイトちゃん…………ありがとうございます!」

未来は頭を深々と下げて礼を言ひつ。

「そんなに隠まらなくとも…………私達、友達でしょ
「はい!」

未来は頭を上げてそつと囁つた。

新しい光（前書き）

修正したら投稿という形を取ってこられたことと思こます。

新しい光

メビウスがディノゾールを倒して数日後、未来と零斗が住む海鳴市である異変が起きていた。

「あ、また電気が

ディノゾールを倒してからの数日間、海鳴市ではよく停電が起きた事が多かった。

「あらまた停電」

「ここののはの両親が経営を営む喫茶店・翠屋、今喋ったのはその母親の高町桃子。

「最近多いな

次に父親の高町士郎。

「軍の方でも一応調べてるみたいだよ

そして姉の高町美由希。

「この前ウルトラマンが現れてからだよね、停電が起つやすいのは

「はい、ですがそろそろ復旧しますよ

星奈がそう言つと電気が再び点灯した。

「すぐに直るのも一番怖いんだけどね」
「そうだ2人とも、今日新しく2人バイト入るから」
「やうなの？」

となのはが言ひと士郎は頷き。

「やうそろ来るはず」

すると店のドアが開き。

「あ、零斗くんに未来くん」
「なのはちゃん！」

そこに入ってきたのは零斗と未来だった。

「なんだ知り合いなのか？今日から新しくこの2人がここで働くから

「結構似合つてますね」

未来と零斗は翠屋で使っているエプロンを着ていた。

「やうですか？」
「まあ……
(ホントはなのはに言われたかった)」

零斗は心の中でボソッと呟つけていた。

「それじゃ仕事の内容の説明を」

なのはが何をやるか説明しようとしたら、きなりまた電気が消える。

「また停電だ」

「家に居る時も停電起きたよな」

「確かにディノゾールが現れて以来ですよね」

未来が「ディノゾールの名前を口にすると」

「輝、何で「ディノゾールの名前を知っているのですか？」

「えっ！？」

「まだ軍は名前を発表していないのに」

「確かに……何で？」

未来はどうぞとおどおどしていた。

「あ、それ私が教えたの」

「「フエイトちゃん！」」

そこにフエイトが同じHプロンを着て入ってきた。

「フエイトちゃんが教えたなら納得」

それで納得しても、未来は安堵の溜め息をついた。

（未来、気をつけてよ、未来がメビウスなの秘密何でしょ？）

（まあとできる限りだけどね）

未来とフヨイトは念話で会話をする。

(やう言えば零斗も一緒に転校してきたけど……もしかして?)
(僕と同じウルトラマンだよ)

やうとそれを教える未来、もつ自分の正体バレてるから別に大丈夫。

(未来、そんな易々教えちゃダメだよ?)
(あ、…………)めん)

と謝ると伸び電気が付く。

「うう何回も停電になると変な感じだよね」
「だよな……」

(この停電、普通じゃねーな)」

零斗はこの停電に違和感を感じていた。

(近い内に調べてみるか)

と考えていた。

「風森くん、輝くん」

士郎が話し掛けてきた。

「何でしょうか?」
「何ですか?」

「なのはじめた事を玉やなよ」

「せつへ」

十郎のその一言で零斗は顔を上げ。

「？」

未来はどういう事なのか解らず頭上に疑問符が浮かんでいた。

「なのはを恋愛対象にするなよ、もちろん星奈も」

「お、お父さん！？」

「十郎さんへ？」

その言葉にはなのはと星奈もかなり驚く。

「十郎さん」

「なんだい？」

未来が手を上げて何かを質問しようとしていた、その質問の内容でなのはとフロイト達が固まりついで……

「れんあこって何ですか？」

カチン「カチン……

「み、未来？」

「どうかしましたかフロイトちゃん？」

未来はなぜ呼び掛けられたのかが解らす。

「素なんだ」

「素なんですね」

「素なんだね」

「素なのか」

「それが未来」

上からフローリー、星奈、なのは、士郎、零斗と隣る。

「？」

やはり未来は何なのが解らなかつた。

そして零斗達は仕事を始めた。

それから一時間後。

「.....」

(「JR、怖い」)

零斗はテーブルを拭いている時や注文された品と食べ終えた食器を運んでいる時もずっと士郎に殺氣が込められた目で見られていた。

(「あんね零斗くん」)

なのはは零斗に心の中で謝つていた。

(「フローリーちゃん、わたくしの士郎ちゃんの言つた事、どうこうの意味?..」)

(「ホントに解らなくて?..」)

(「うそ」)

未来はやはりわたくしの会話の内容が解らずフローリーに聞くがやはり解らなかつた。

（未来…………私が一般常識教えてあげようかな？同じマンションだし）

そつ新ツツヒイトだつた。

「停電？」

「ああ、海鳴市で以上な回数の停電が起きている」

ムナカタがカイトとミズキに海鳴市で起きている怪奇現象の事を話していた。

「2人には今からシャーロックで海鳴市に向かいその調査をしてきて欲しい」

「了解」

そしてカイトとミズキはシャーロックと言う車両で海底トンネルのシークレットハイウェイを通り海鳴市へ向かった。

「カイトはどう思つ？」の停電」

「どうつて……やっぱ以上だと思つ、だって一時間で十回は停電になるなんておかしいわ」

「そうね……もしかしたら電気を食べるタイプの怪獣かもしれないわね」

シャーロックはシークレットハイウェイを出て地上に、海鳴市内に

入った。

「『』が海鳴市、確かエース級の魔導師が10人以上も居る街だよね？」

「そう、それも6人ぐらいは高校生よ」

「スゴツ！」

「ほら、この前の『イノゾール戦に居たじゃん、金髪の娘が、あの子がそうよ、名前は確か……フロイト・テスター・ロッサだつたわね』

そう話していると翠屋の前を通り過ぎようとしたら。

「カイトーあれ見て！」

「あつー！」

ミズキが指差す方をカイトは見るとシャーロックを止める。

「宇宙船！？」

それは円盤状の宇宙人が乗る宇宙船だった、それを見た人々は一斉に走り逃げ出すと騒ぎで翠屋から零斗達が出てくる。

「イルマ隊長！」

「こっちでも見えてるわ」

ダイブハンガーの指令室のモニターに宇宙船は映し出されており。

「目的が解らないからまだ攻撃しないで、もしあつちが撃つてきたらリーダー達を出撃させるからその時はあなた達が先に攻撃して」

「『』解」

2人はイルマの指示で様子を見る事にしたがそれはすぐに次の指示に移る事になつた。

ドガ――――――ン！

宇宙船は下部の尖っている先から黄色い稲妻状の光線を発射、街を破壊し始めた。

「もう少しきつてもいいやがった！」

カイトはシャーロックの後部にあるレーザー砲を起動させ砲門を宇宙船に向け。

「スクロール砲、発射！」

青白いレーザークロール砲が発射されるが宇宙船は避ける。

「ダメか！」

「ああ！」

アクセルを踏みシャーロックは走り出す。

「ハヤシアゲやん！」

「零斗くん達はすぐこって、あれえ？」

「輝は！？」

なのはは逃げるがいいとおもひとしたら零斗と未来は居なかつた。

(もう行つたんだ)

フェイトは2人の行き先が解つていた、するとメビウスが現れ空を飛ぶ。

「メビウス！」

レジストコードはメビウスに決まって居るためなのはメビウスと叫ぶ。

「セアツ！」

メビウスは金色の手裏剣光線、メビュームスラッシュを放ち宇宙船を追撃するが避けられる。

「なのは、いこつ！」

「うん！」

フェイトとなのはとセイナはバリアジャケットにセットアップ、デバイスを起動させる。なのはのバリアジャケットは白をメインにし青いラインが流れ胸には赤いリボン、サイドテールだったのがツインテールに、デバイスは杖の先に三日月みたいな金色の飾りがついてその中に赤い宝石があるレイジングハート・エクセリオン、星奈のはなのはに似ているが髪型は変わらずバリアジャケットは白ではなく赤紫でデバイスも似ているがそれも赤紫っぽいルシフェリオン。

「それじゃ……！」

3人は飛び立つ、それはカイト達の目に入っていた。

「魔導師！」

「しかもエースオアエースの高町なのはも雇るわよ！」

なのはは一般でも結構有名なため知らない者が少ない。

「私達はメビウスを援護しよう」

二
一
九
八
年
一
月
一
日

解説

フロイトはそう言いメビウスを援護する事になつた。

（今回も零斗、出ないみたい）

未来が変身したため零斗は離れた場所から戦闘を見ていた。

「セアツ！」

メビウスはメビュームスラッシュを連射し続ける。

なのはは桃色の砲撃魔法のディバインバスターを放つがやはり避けられる。

「すばしっこい……！」

星奈は冷静にそう言うとなのは、フェイトと一緒に無数の魔力弾を放ち宇宙船はそれをギリギリで避ける。

「スクロール砲、発射！」

スクロール砲が発射され同時にメビュームスラッシュが宇宙船に命中、

宇宙船は山の方に姿を消した。

「ショアツ！」

メビウスはそれを追い掛けたのだった。

「取り敢えずはこれで終わりかな？」

「後はみら……じゃなくて、メビウスに任せよつ」

フェイトは間違つて未来と言いそうになつたが訂正、3人は地上に降りてバリアジャケットを解除した。

それからガツツウイングがやつて来て宇宙船が墜落した辺りを飛ぶが宇宙船は無く完全に破壊されたと考えカイトとミズキを残して帰還した。

だが……

（未来が帰つてこない……どーしたんだアイツ？）

零斗は未来が帰つてこないのに不信に思い宇宙船が墜落した山へ向かおうとしたら。

「あ、零斗くん！」

そこで帰ろうとしていたなのは達と出合した。

「なのは……」

「どうして行こうとしているんですか？」

「ちょっと山の方にな」

「え？ でもさあさすがに船落ちたから危ないよ～」

なのはと星奈に行くのを止めさせられるが。

（もしかして…… あうだ、零斗もウルトラマーン（ひ）

と思い念話で話し掛けた。

（聞く）えの零斗？

（フ）ヒート？ 何で俺とお前が念話で会話できるの？

（未来がメビウスって事知ってるよ）

（アイツ、喋ったのか…… まあその方が動きやすいか）

零斗はそのまま会話を続ける。

（それで未来はどうしたの？）

（帰つてこないんだアイツ、アイツ真面目だから絶対寄り道なんかしないの）

（確かに、未来は真面目だから絶対真っ直ぐ帰つてくるよね……
そしたら）

「」で念話を切り。

「やしたらなのは、星奈、誰かが零斗に付いてここのへのせびつへ。」

そう提案をすると。

「それなら……」「

「問題ありませんね」

その提案を同意、誰が零斗についていかで話しあつた結果。

「それじゃ行こ、零斗くん」

「ああ」

なのはが一緒に行く事になり零斗と2人、宇宙船の墜落現場へ向かつた。

フェイトと星奈は翠屋へ戻る、その途中で。

「フェイト」

「どうしたの星奈?」「

「何か隠してませんか?」「

「何かつて何?」「

「例えば……輝と風森が何なのかを?」「

しばらく沈黙すると先に質問した星奈が。

「輝と風森がウルトラマンだと言つ事を

「証拠は?」

それを言われてもまだポーカーフェイスを突き通すフェイト。

「さつき貴女がメビウスの名前を言つ前に未来と間違つて言つやつになつた事、後、彼等から魔力とは違つ別の力を感じると言つ事」

「別の力?」

「一応私達は闇の書から生まれたもの、魔力以外の異能な力を感じるのも容易いです、これはアホな雷羽も感じられます」

そしてしばらくまた沈黙するとフュイトは深呼吸をする。

「星奈は勘が鋭いね、あの3人の中で特に「じゃないとやつていけません」

「確かこの辺りだよ」

零斗となののはは宇宙船の墜落現場に到着、そこには湖があり宇宙船の破片らしき破片は落ちていなかつた。

「何もないな」

「GUITARじゃメビウスが破壊した事になつてゐるからね」

「そりが……

（アイツがそこまで追い討ちかける事ないから…………多分どこかに宇宙船があるはずだ）」

2人は湖の近くに寄りつとしたら。

ピシャン-ピシャン-

「二や、二やにー？」

突然湖の水面が光、水柱が立つたと思つたら。

「キシャアアアアアツ！――――！」

「か、怪獣！？」

頭には三田円型の黒いアンテナみたいな角が一本回つており手には一本の爪と長い尻尾で白いで至るところに黒い牛みたいな模様がある宇宙放電怪獣エレキングが現れた。

「エレキング？ だけど違つ……」

そう呟くとエレキングは2人を見つけ両手の指の穴から火炎放射を放つ。

「危ない！」

なのははすぐさまセットアップ、零斗の腕を掴んで飛んで火炎放射を避ける。

「危ねえ……」

「エレキングにあんな能力あつたか？ 確か再生エレキングに火炎放射の能力が……」

「零斗くん、あの怪獣に詳しいね」

零斗はやべつて表情になるとある物を発見した。

「なのはー森の中ー」

「えつ？ あー！」

森の中には壊れた宇宙船があつた。

「何で見付からなかつたの！？」

「多分透明になつてステルス的なもんでも張つてたんだろう？」

「本当に詳しいね」

「あ、ああ……つてなのは、この状態どうにかしない？」

「え？ ふえええええええつ…………？」

この状態と言つのは空を飛んでいるためなのはが零斗を抱きしめて
いる状態だった。

「つてわつー？」

なのはがバランスを崩して零斗が落ちそうになるが何とか腕を掴む。

「取り敢えず宇宙船の中に入ろう」

「零斗くんは下で待つて」

「おいおい、俺をあんな化け物がいる所に待たせるのか？」

零斗は口から電撃光線、両手から火炎放射を放つエレキングを見て
そう言ひ。

「た、確かに……」

渋々零斗を連れていく事にし、地上に降りるとエレキングは気付き。

「エレキングが！」

「しゃあねー！」

零斗はベルトに付けていた箱を開き青いカプセルを取り出す。

「イケツーミクラス！」

青いカプセルを投げると投げた先でカプセルは光、そこに一本の大
きな角でバッファローに似たカプセル怪獣ミクラスが召喚した。

「零斗くん！？」

ミクラスはエレギングを突進で吹き飛ばし戦い始める。

「ミクラスが足止めして居間に入るぞ！」

「う、うん！」

2人は宇宙船の中に侵入した。

「零斗くん、あの怪獣は？」

「話は後でな」

2人は宇宙船の操縦室っぽい部屋に入った。

「ここが操縦室っぽいね」

「だな……つ！未来！」

そここの操縦席とは違う席に未来が縛り付けられていた。

「未来くん！」

「あ、零斗くん、なのはちゃん」

未来は苦笑いしながら2人の名前を呼んだ。

「『』めん、捕まっちゃった」

本当に未来は申し訳ない顔で誤り今にでも泣き出しそうだった。

「泣くなよ未来ーお前が泣くと手が付けられないんだからー」

とか叫ぶと。

「あら、またお密さん?」

そこに可愛らしい少女が2人入ってきた。

「ピット星人！」

未来はその名前を叫ぶ。

「宇宙人なの！？」

なのははどこからどう見ても人間の少女なため驚きが隠せない。

「「アハハハハハハ」」

笑いだと2人は異形な姿に変わり変身怪人ピット星人となる。

「本当バカよね~宇宙船の墜落で巻き込まれたと思って近付いてきて捕まっちゃうなんて男って可愛い女の子に弱いんだから」

「それは違うと思つ、未来は誰にでも優しいから男と女関係無いと思つ」

「それじゃ貴方はどうなの？」

それを言われ。

「俺は……」

零斗はチラつてなのはを見る。

「俺も興味ないな……」

「もーうー何なのよあんた達はー！」

ピット星人はキレて声を上げる。

「外にはいきなりミクラスが出るしー。」

「こうなつたら飛ばすわよー！」

ピット星人は宇宙船を起動するスイッチを押して宇宙船は飛び立つ。

「本当に飛ばしちゃったのー!?」

宇宙船は本当に飛んでしまい脱出しそうにも未来も居るため飛ぶ事もできない。

外ではミクラスとエレキングが激戦を繰り広げていた。

「グオオオオオー！」

「キイイイイイー！」

ミクラスは得意の接近戦でエレキングを攻撃。

「キキイイイイイー！」

エレギングはミクラスに長い尻尾を巻き付け放電攻撃を繰り出す。

「グギヤアアアアアツ！－！－！－！－！？」

「ミクラス、戻れ！」

零斗はミクラスをカプセルに戻し箱にしまう。

「もしかしてあんたウルトラセブン！？」

ピット星人は昔地球を守ったウルトラセブンの名前を口にするが。

「思い出したくない名前言つてんじゃねーよー！」

なぜか零斗はセブンの名前を聞いて不機嫌になる。

「俺はセブンでもないし……俺は！」

ポケットから何かのアイテムを出しそれを右に展開されメガネのような物になる。

「デュワツ！」

それを目に付けてスパークさせ頭から爪先にかけて姿が変わっていき青い光を発したのはと未来を連れて壁を突き破り外に出る。

「私達の宇宙船が！」

「ジユワッ！」

青い光は地上に降り頭に一本のブーメランに額に緑色のランプ、身体にはプロテクターが付いており真ん中にはカラータイマー、銀色のラインで赤と青に別れた身体のウルトラマン、ウルトラマンゼロが現れしゃがみ、なのはと未来を下に下ろした。

「零斗くんが…………ウルトラマン…………！」

エレギングはゼロに気付き三田田状の光線を連射する。

「ジユウッ！」

ゼロはそれを両手を広げてウルトラゼロバリヤーで弾き返す。

「ジユウッ！」

ゼロはエレギングに接近し腹部に連續パンチを喰らわせると次にアッパーで顎に喰らわせて殴り上げる。

「デアアアアッ…………！」

落ちてくる時に回し蹴りを喰らわしエレギングは九の字に曲がりながら蹴り飛ばされる。

「す……」

「零斗くんはウルトラマンレオの下で修行してたから接近戦に強い

んだ

ゼロゼンジャーが回転するとヒレキングの背中にかかと落としを喰らわせる。

「ちよつとーあのウルトラマン強すぎるのはよーーー！」

「ヒーローも攻撃するよーー！」

宇宙船から光線が放たれ背中に喰らひつつ。

「ジユッ！？」

その隙を付かれヒレキングは尻尾でゼロを巻き上げ放電攻撃をする。

「ジユアアアアアッ…………！」

「キイイイイイー！ー！ー！」

ヒレキングは締め付けと電気の強さを高めていきゼロに更にダメージを「」える。

「零斗くん！」

するとなのははレイジングハートを宇宙船に向けて。

「ディバイン…………バスターアアアアアー…………！」

ディバインバスターを放つて宇宙船を攻撃。

「今何！？」

「さつきの魔導師か！しかもこんなに強い威力なんて…………魔王か

! ?

因みに話の内容は外に聞こえており。

「誰が魔王なのかな？」

え？」「

なににせん!?

エレギングは恐怖のあまり拘束するのを止めゼロを解放した。

「もう一度……ディバイン……バスターアアアアアーツ！！！！！」

最大出力で、デイバインバスターが放たれ宇宙船に直撃。

ギヤアアアアアアアアアツ！！！！！！

宇宙船は木端微塵で爆発した。

（なのはが……ま、魔王……）

ゼロはめちゃくちゃ震えていた。

エレギングは「」の空氣に耐えれなくなり光線や火炎放射を放つが当たらない。

「ジユツ……」

ゼロは右手をカラータイマーに近付け左腕を拳にして後ろに引きビームランプから緑色の光線、エメリウム光線を発射しエレギングの角を破壊する。

「ダアアアアアアアツ！……！」

ゼロは頭に付いているゼロスラッガーを投げ飛ばしエレギングの尻尾と頭を切り裂き、その傷口から血が流れエレギングは爆発し絶命した。

「どうあえず何とかなったか

変身を解いて零斗の姿に戻る。

「零斗くん

「な、なのは！」

零斗はわざのなのはを見て恐怖を覚えていため少しふりクリした。

「何でビックリするの？」

「な、にゃんでもありますん！」

未来は今にでも泣きそうな田だつた。

（怖かつたよ〜（泣））

それから海鳴市で起きていた停電現象はエレキングが倒されて以来
起きていない。

ウルトラマンマックス誕生！（前書き）

これはあまり変更点なし。

ウルトラマンマックス誕生！

「こ」の前現れたウルトラマンの名前が決まったわ、レジストコードはウルトラマンゼロよ

ダイブハンガーの指令室ではイルマがゼロの事を話していた。

「今回で2人もウルトラマンが！」

ヤズミは2人もウルトラマンが現れた事により興奮していた。

「テンションが上がる気持ちは解るけど落ち着けよヤズミ」

「あ、すみません」

シンジヨウに注意され謝るヤズミ。

「この2人が味方と言つ事は確実だ、我々もウルトラマン達に負けないように努力しなければならない」

ムナカタがそう言つとイルマ以外は「はい」と答え会議は終了、それぞれの仕事に取り掛かる。

数時間後、龍巖岳と言つ場所にある火山が突如噴火したと通報がありGUTSはすぐに調査へ向かった。

「休火山だつたはずなんやけどな～」

ガツツウイング2号にムナカタ、ホリイ、シンジョウ、ミズキが乗つており1号にはカイトが乗っていた。

「まあ自然現象だからな、いつ怒るか解らない、着陸して調査をするぞ」

二機は着陸しカイト達は機体から降り調査を開始。

「暑いわね～……」

「火山が急に噴火したからな……暑いのは無理ないか」

カイトとミズキはペアを組み調査をしていた。

シンジョウとホリイもペアを組みムナカタはガツツウイング2号で待機していた。

「そう言えば地元の住人の避難はどうなつてるの？」

「それなら今は魔導師部隊が進めてるからすぐに終わるわよ」

龍巖岳の麓には街がありそこは一般魔導師部隊が避難を進めていた。

「そなんだ……あの子達は？」

「あの子達つて……海鳴市の？」

「そう」

「あの子達は軍に入つてるけど入つてないみたいなものだから軍が協力の依頼をするか自分達から手伝ってくれるかのどちらかだから、何でも屋みたいな感じだからここには来てないわよ」

あの子達とはもちろんなのはとフェイト達の事である。

「まあ私達だけじゃ切り抜けないなら呼ぶかもしないけど、だけど何で聞いたの？」

「いや、できる限りは俺達で解決しないとなつて思つて、まだ高校生なのにこんな命を落としかねない現場に放り込むなんて」

カイトはあまりなのは達を戦わせたくないと言つ考えから聞いた質問だった。

「さうよね……ウルトラマンにも言える事よね、私達だけじゃホントにどうでもならない時に、できるなら私達で怪獣を倒さないと」

ミズキも同意見だった。

「だねー。」

その頃、天高では……

「未来、恋愛はね、男と女が互いを好きになつて恋人になる事が恋愛なんだよ？」

「なんだあー」

ハヤテの教室ではフヨイトが未来に一般常識を教えていた。

「フヨイトちやんと未来くん何してるの？」

そこに零斗となのはとヒナギクがやって来てハヤテとナギに話し掛ける。

「未来くんが常識をあまり理解してないとかでフロイトさんが一般常識を教えているところですよ」

「まったく……恋愛と恋つ言葉を知らなかつたとは情けない」

「いつも言つナギはじうなのよ? 愛の告白と間違えたあの言葉の意味

「む、昔の事を掘り返すな!」

ナギは顔を真つ赤にして怒つた。

「う、うめんなさ」

自分が原因なためハヤテは謝る、理由は借金押し付けられた時にナギを拐おつとした際に『瓶が欲しいんだ』の言葉を愛の告白とナギは間違えたため。

「そんな事があつたんだ、このチビスケ」

「なー」

零斗はさつさながら? ナギの悪口を叫つた。

「零斗くん、悪口言つちやダメだよ?」

「だけどホントの事じゃねーか」

「それでもダメなの、解つた?」

下から覗き込むようになのは零斗を覗上げて。

「解つた……言わねーよ」

そう言った。

「次はスポーツの事を教えよっか?」

「はい!」

「フェイトと輝くん、何か親子みたいね」

「確かに」

ナギとヒナギクは未来に何かを教えるフェイトの2人を親子みたいと言つ、未来がちゃんと理解して答えられると頭をフェイトが撫でているところもあった。

「何か変わったようなのねーな」

「せやけど何があるのは確かのようやで」

シンジョウとホリイはつり橋を渡つていたらホリイは下に何かの大きな足跡を見つけた。

「これは……!」

「怪獣の足跡かもしだへんな、この場所を記録しておいてウイングに戻ろ!」

2人はこの足跡を報告、カイトとミズキも合流し機体に乗り込みそれでその足跡を追つた。

「足跡は火山の方に続いてるな」

「今回の怪獣は火炎系の怪獣か……厄介やな」

「何で厄介何ですか？」

カイトはどういう意味か解らず質問をする。

「炎の怪獣が現れるとなそれに対抗せんと冷凍怪獣が出てくる事が
あるんや、そしたらわいらは一体の怪獣を相手にせんとアカンのや
カイトはホリイの説明を理解し「なるほど」と呟いてると地上が
ら突如土と砂煙が舞い上がった。

「なんだ！？」

すると地底から背中に赤いコアと長い首と長い尻尾に四足歩行の怪
獣……溶岩怪獣グラングンが姿を現した。

「ガオオオオオオオツ……！」

「グラングン！？グラングン！や……溶岩怪獣グラングン……」

グラングンは過去に何度か現れた事があるためデータに残っていた。

「グラングンが出たか……するとラーラスも出る可能性あるな」

ラーラスとは冷凍怪獣ラーラス、グラングンとは敵対関係の怪獣、
ラーラスも何度か現れた事がある、

その時には必ずグラングンも出現していた。

「リーダー！」

「各機、グラングンを攻撃、人里には近付かせるな！」

「「「「了解！」」「」」

Gコト-Sはグランゴンに対し攻撃を開始した。

ガッシュウイングは一ドルレーザーを連射しグランゴンを攻撃していく。

「喰らえ！」

カイトはガッシュウイング1号の機動性を活かしひしにギリギリまで接近してレーザーを撃てる。

「カイト上手いじゃないの！」

「ウイング1号は速いし小回り効くからこいつ戦い方が得意からな！」

「ウイング1号の機動力を活かすなんてな、入隊間もないパイロットが

「我々も負けてられんぞ！」

ガッシュウイング2号もレーザーでグランゴンの頭を攻撃していく。

「グゴオオオオオオオッ！」

グランゴンは口から火球を放つが難なく避けられる。

「よしー！」

避けると再び攻撃を開始する。

その頃風都湾沖合いで

漁師が船で風都湾から出て魚の漁に行こうとしていたら突然波が荒くなってきた。

一
波が荒いな
.....
「

船も大きく揺れ始めひっくり返りそうになるくらいだつた。

「うわー！？ これ、どうしたんだー！？」

すると突然水柱が立ち。

船はそれで50m以上吹き上げ海面に激突して沈没した、そして海中から水柱を現した青く背鰭みたいな物がある怪獣、冷凍怪獣ラゴラスが現れ陸を目指した。

「ギヤオオオオオオツ！」

ラゴラスは雄叫びを上げながら歩く。

「リーダー！ 風都湾にラノラス出現や！」
「解つた、カイトとミズキは急いで風都湾に迎え」
「了解！」

ムナカタは冷静に命令を出しカイトとミズキが乗ったガッシュイン
グ1号は風都湾へ向かった。

「ホリイ、デキサスビームをいつでも射てるようにならんとしておいて
くれ」
「了解！」

ホリイは後部座席のパソコンのキーボードに何かを起動させるため
の準備を始めた。

「シンジョウ、グラングОНはどこへ目指してます？」
「こまま進めば麓の町を通りてから風都へ目指してます」
「やはづラスが出現したからか」

ガッシュウイング2号はレーザーを発射し続けグラングОНの進行を食
い止める。

風都へ向かったカイトとミズキはすぐ「風都湾の海上に着きラス
スを確認する。

「ラス確認！」

そしてラスへ攻撃を開始する。

「ガオオオオオッ！」

ラスは口から青い冷凍光線を吐きガッシュウイング1号を攻撃す
るが避けられる。

「カイト、ラゴラスの頭狙つて攻撃して」「了解！」

ミズキに言われた通りにラゴラスの頭を狙つてレーザー発射のトリガーを引く。

「ギヤオオオオオツ！？」

頭にはやはり効いているらしくラゴラスは苦しみの声を上げる。

「やつぱり効いてるみたい！」

「カイト！ 軍の魔導師部隊が到着したわよ！」

そこに軍の魔導師部隊が駆け付け砲撃魔法を放つ。

「一機じやキツかつたから助かる！」

カイトはラゴラスの頭に狙いを定めレーザーを発射する。

魔導師達もそれを見てラゴラスの頭に砲撃を放ち攻撃していく。

「よし！ 効いてる！」

ガツツウイング1号は急上昇し一気に急降下しながらラゴラスの頭を攻撃し海面すれすれで徐々に上昇し機体のバランスを取る。

龍巖岳では……

「シンジヨウ、冷凍メーカー発射！」

「冷凍メーカー、発射します！」

ガツツウイング2号の機首から冷凍メーサーと言つ冷凍光線を発射しグランゴンを凍らせる。

「ホリイ、デキサスビーム発射スタンバイ」

「待つてました！」

次に機首が展開し中からハイパーレールガンと呼ばれる砲門が現れ。

「デキサスビーム、発射！」

デキサスビームと呼ばれる強力な光線が発射されグランゴンに命中、グランゴンは倒された。

「よしー!ラ"ラスを迎撃に行くぞ!」

風都湾に視点を戻すとラ"ラスはゆっくりだが陸地に近づいており軍の魔導師部隊は陸地からでも砲撃が届く距離だった。

「ギャオオオオツ！」

「――うわあああああああつ――――?」

ラ"ラスは冷凍光線を港に向かつて発射し魔導師達はその爆発に吹き飛ばされる。

「大丈夫か!?」

「しつかりしるー!」

死人は出でいないものの重傷者が多く戦える状況ではなかつた。

「ミズキ、俺達がラゴラスの注意を引き付けよう!」

「オッケー!」

カイトはラゴラスの注意を引くためにガッシュウイング1号をラゴラスの真っ正面を飛ぶ。

「ガオオオオオツ!-!-!-!-!」

ラゴラスは冷凍光線を乱射する。

「うわつ!-?」

後ろから狙つてくるためギリギリの所で避けるが限界があつた。

「きやつ!-?」

光線は左の翼に当たり、ガッシュウイング1号は墜落し始める。

「脱出しよう!」

脱出レバーを引くが脱出したのはミズキだけだつた。

「カイト!-」

ミズキは大声でカイトの名前を叫ぶがガッシュウイング1号はだんだんと高度が落ちていく。

「脱出できない！？」

脱出装置は後部座席のだけが作動し操縦席の装置は作動しなかった、翼が破壊された際の衝撃で故障してしまったのだ。

ラゴラスは重傷を負っている魔導師達が居る港を目指し歩く。

「いひなれば！」

カイトは重い操縦桿を動かしラゴラスの方に向け生きているレーザーの発射機能を使いレーザーでラゴラスの注意を引く。

「カイト！水面に着水させて！」

通信機で呼び掛けるが聞こえているのにも関わらずカイトは攻撃する、怪我して身動きができない人達のために。

「うおおおおおおおつ！――――！」

ガツツウイング1号はラゴラスの真っ正面を飛びレーザーを発射しまくるとラゴラスはそれに目掛けて冷凍光線は発射する。

「カイト！」

冷凍光線が当たりそうになつたその時、機体を赤い光が一瞬包みコスクピットからカイトは消え、冷凍光線は機体を撃ち抜き、ガツツウイング1号は爆発した。

「そんな……！」

そこにガツツウイング2号が到着する。

「間に合わなかつたのかよ！？」

シンジヨウは悔しさのあまり声を上げる。

「カイトの犠牲を無駄にしないためにラゴラスを倒すぞ！」

ムナカタは悔しさを表に出さざるにじう指示し攻撃を開始する。

力……

カイ……

「カイト」

「ここは……」

カイトは光輝く空間の中で目を覚ますと。

「気が付いたか」

「君は……」

目の前には赤く銀色が流れる身体で胸には銀色のプロテクターをし金色のラインが六つに真ん中には青く輝くパワータイマー、目はオレンジ色に輝いており左腕にはメビウスブレスに似ているが形がプロテクターに似ている金色のアイテム、マックススパークを付けた巨人が居た。

「ウル……トラマン?」

「そうだ、私はM78星雲から地球を守るためにやって来たウルトラマン、ウルトラマンマックスだ」

「ウルトラマンマックス」

「君の自らを犠牲にし誰かを守ろうとした戦つ勇気に共振する個性を感じた、君に力を与えたい」

「力を……」

「これを使え」

マックスはその場から消えるとマックススパークだけが残りカイトはそれを取り握りしめると光に包まれた。

「なんだ！？」

ラゴラスの目の前に光輝く柱が現れ、光が消えるとそこにはカイトが変身したウルトラマンマックスが現れた！

「新しい光の巨人……！？」

ムナカタは静かに咳くとマックスは素早くラゴラスに接近し腹部にキックを繰り出し蹴り飛ばす。

「デュアツ！」

そしてまた素早く移動し立ち上がったラゴラスにエルボーを喰らわすとラゴラスは口から唾液を吐ぐ。

「ディアツ！」

「ガオオオオオツ！？」

マックスは腹部に連續パンチを繰り出しラゴラスを追い詰めていく。

「うおおおおおお……！デュワツ！……！」

ラゴラスを持ち上げ遠くへ投げ飛ばした。

「ガアアアアアツ！……！」

ラゴラスは口から冷凍光線を発射するが。

「シユワツ！」

マックスは頭に付いているマクシウムソードを投げ冷凍光線を受け止める。

「デュワッ……！」

そしてマックススパークが付いた左腕を高く上げ光エネルギーを貯めていきそして腕を二字に組み必殺技マクシウムカノンを発射、光線はラゴラスに命中、ラゴラスは粉々に吹き飛び倒されマックスは両手を広げ空へ飛んでいった。

「ウルトラマンが怪獣を倒した……だけカイトは……」

気持ちが沈んでいると。

「コーダー・シンジヨウーあれーー！」

ホリイは海面に浮かぶ何かを見つけた。

それは港にいたミズキも見つけた。

「カイトー！」

それは海に浮かぶピンピンしているカイトだった。

ガツツウイング2号は着水しカイトとミズキを乗せダイブハンガーへと帰還したのだった。

青・春・変・身（前書き）

完成したお！
やっぱ未来はオーズにします。

「遅刻だー！」

とある朝、げんたは朝を寝過じし自転車を漕いでいた。

「田覚ましなんで鳴らねーんだよー。」

田覚まし時計が鳴らなかつたらしき。

余談だが時間はセツトしたが鳴るよつてスイッチを押さなかつたのが原因。

「あれ？ げんちゃんー。」

「おおこなたー！」

隣に自転車に乗つたこなたがやつてきた、さうやら遅刻のよつだ。

「げんちゃんもー？」

「こなたもか？」

げんたは常人じや普通あり得ないぐらこのスピードを出しつづるがこなたは運動神経抜群なためその速度に着いてつづる。

「昔から変わらねーなお前ー！」

「げんちゃんもねー！」

すると隣を走り去るバイクが一台。

「やばつー。遅刻だ遅刻だー！」

「「ちよつと城先生も遅刻つて、アンタ教師でしょー?」」

バイクに乗つてゐるのは城茂といつ実技の自動車整備の授業を担当してゐる男だ。

「お先に!」

「バイクズルいよ~」

げんたはいいなあといつ田で見ていた、天高の門が見えてきたが。

「茂、泉、水月、アウトだ」

門は閉まつておつそに立つてゐたのは科学担当の風見志郎だつた。

「そりやないつすよ~風見先輩~」

茂はバイクを停めると続いて一人も自転車を停め息を調える。

「いーや、アウトだ、後で本郷先輩にきつちりと説教を受けてもらひやがれ」

茂は「はーい」としづしづ答える、本郷とは本郷猛、同じく科学担当の教師。

「君達二人はこれに名前と学年と組を書いて入るんだ」

生徒には至つて優しい風見先生。

「すみません今日も」

「もう馴れた」

軽く会話をすると「あなたは校内に入つていき茂も続」いつと
したら首根つゝ引つ張られた。

「「あなた」アンタまた遅刻なの？」

「「ぬ～ん」

教室に入るとそこに待つていたのは紫の長い髪の毛でツインテールの女子生徒柊かがみ、因みに隣のクラスの生徒。

「「あなた」やん今日も自転車？」

次に話し掛けたのはかがみに似た女子生徒だがショートヘアの柊つかさ、かがみの双子の妹である。

「お疲れ様です泉さん」

最後にピンクで長い髪の毛でメガネを掛けた高良みゆきが口を開いた。

「いやいや、今日も朝からいい汗かいた……てかなんで遅刻したのにまだHR始まってないの？」

そつ、遅刻したのにも関わらずホームルームは始まつておらずわい話している生徒が多かつた。

「黒井先生とひかる先生、遅刻みたいなの」

桜庭ひかる、かがみのクラスの担任で教師での遅刻常習犯である、ななこと茂も常習犯でこの三人はその事があるからなのか、仲が良い。

「あたしそろそろ戻るね、風見先生と本郷先生の説教が終わつた頃だと思うし」

主に教師の遅刻指導は風見と本郷らがやつており長いに有名、かがみは自分の教室へ戻つた。

「げんちゃん、そろそろ黒井先生来るよ？」

げんたちは先ほど全力疾走で疲れたのか、うつ伏せになつてぐつたりしていた。

「まったく、遅刻するといつもこいつなんだからもつ」

「こなちゃん、げんたくんのお母さんみたいだね」

「世話が焼ける子が一人もいて大変だよ、ねーけんご？」

後ろの席に座つているけんごに話を振るつと後ろを向いてしまう。

「ほらね」

そしてななこがやつてきてホームルームが始まるが起きないげんたは出席簿チョップを食らい起きる事になつたのはいつまでもない。

それから時間が経ち昼休み。

「め～し、め～し、め～し~~~~~と

げんたは食堂に訪れ適当に椅子に座るが。

「げんちやんダメだよ～そこ座りや～」

「なたがやつてきてげんたをその場から立たせよ～」

「げんちやんは初めて食堂使つかり知らないこと思ひナビね～」

生徒のほとんどは教室、又はそちらの売店で買い屋上や中庭で食事するものも、だが食堂ではグループに別れてテーブルを使っている。

「そんなルール聞いた事ね～よ～」

「げんたは断固として退こうとなかったが。

「や二じに面のアリシア、退くんだ」

するだけが座る席を使うグループが、そこはアメフト部の部長とチア部の部長が座る席である。

アメフト部の部長の名前は上文字はやと、チア部の部長の名前は城風みう、二人共げんた達一年上の先輩である。

「トライシュー？」

「貴方の事よ」

みうがそう言いげんたは自分の事だと氣付くがこなたもトライシューの意味が分かつていなかつた。

「ギークも居るみたいね」

ギークはこなたの事みたいでやはり意味は分かつていなかつた。

「トライシューは"マニアック"という意味で、ギークはマニアックとかそういう意味ですよ」

そこにみゆきが突然現れ、一つの言葉の意味を説明。

「"マニアック"だとー?」

それには怒り立ち上がり。

「"マニアック"箱にな」

はやとは回りを付き纏つていた部員に田代会図をすると、一人の部員はげんたを持ち上げ。

「な、何するんだよー!」

「ミニ箱がある方へ投げ飛ばした、今から始まる喧嘩をシヨーとして見る生徒達。

げんたはキレアメフト部の部員達の喧嘩を買いつりかかつた。

「水月さん、やつ過ぎはまじまじ」と

止める気さらしないみゆきさん、こなたは心配そうに見ていた。多人数に一人だがげんたは互角な戦いを見せており回りは感心していた。

「結構やるじやないか」

またまたはやはと部員に田代命図、なんと部員達はこなたとみゆきを背後から腕を掴み。

「お前それ汚いぞ！」

はやは完全に一人を返して欲しければ大人しくしろと言おうとしていたみたいだが。

「おつやーーー」

部員一人はこなたに軽くあしらわれた、なぜならこなたは空手とか習っていたからである。

「ここの程度雑魚い雑魚い」

はやはと口を開けていた。

「やうだいひ、空手習つて運動神経抜群なんだゆな」

げんたも今じる思ひ出した。

「ありがとう」ぞこます、泉さん

「こやいや、げんちやんーそんな奴ら軽く一捻りしちゃいつて！」

「ねつー」と答える喧嘩は続行、するかと思こいや。

「やめなさい」その一声で生徒達は静まりけんたも回りの流れに任せて静かになる。

『生徒会長ー』生徒の視線の先にはヒナギクとナギ、ハヤテが居た。

「あー、生徒会長今日は食堂でお食事?..」

「そうですよ、城風先輩」

ヒナギクとみうは険悪な雰囲気に、理由はこの学校ではクイーンというものを決めており年に一回はクイーンコンテストという大会行われており生徒を盛り上げている。

去年度の優勝者はみうだが今年は一年にして生徒会長に立候補し見事当選したヒナギクが居りどちらが優勝するかが分からぬ状態だつた。

「クイーンとかには興味はありませんが勝負」となので真剣にやらせて頂きます

「それはそれは、いいわ、受けて立つわ

二人の間にバチバチと火花が散る音が鳴る、だがそんな雰囲気をぶち壊すとんでもない奴等が現れた！

「フロイトちやん、ここが食堂?..

「そうだよ未来

未来とフロイトがやつてきて堂々と学校のクイーンとキング（はやと）が座るテーブル席に、部員達は退かそうとしたが。

「何ですか？未来が先に座つたんですよ？クイーンもキングも関係

あつませんが何か?「

魔導士姿になつてやるならかかつてここにこの野郎状態に。

「やるからには切り殺される覚悟で来て下さこ

バルディッシュを構え、まるで死神のようだつた、部員は怯え大人しくフェイトに従つた。

「フェイトちゃん、お腹空いた~」

「待つてね未来、すぐにお母さんがお腹貰つてきてあげるからね
!」

フェイトは急いで売店へ向かつた、並んでいた生徒達は大人しくフェイトに前を譲つていた。

「お母さんつて……まあいいわ、行きましょ

みうが去るとはやとアメフト部はそれに着いていた。

「なたはシェーッでしながら言つていた。

「フェイト怖ッ!」

「」の学校の生徒共はこの上文字をなんだと思つてゐるんだ

とかみうと別れてグチグチと部員達に愚痴を溢していく。

「なんだアレは？」

すると「ゴツく、身体にオリオン座を思わせるような点が並んでいる怪人、オリオン・ゾディアーツが現れた。

『うわああああああつ！！！！？』

オリオン・ゾディアーツは襲い掛かりはやと達は逃げ出す。

「なんだよアレ！？」

昼食を終えこなたに校内の案内をしてもらっている所で遭遇。

「ゾディアーツ……」

こなたはその怪人を知っているかのように呟くとこなたオリオン・ゾディアーツがはやと達を狙っているのが分かり落ちていた鉄パイプを持ち。

「ちょっとげんちゃん何するつもり！？」

「嫌な奴等だけど俺とダチになる奴等だ、見過すわけにはいかねーだろ！」

げんたは鉄パイプで殴るがオリオン・ゾディアーツの身体は硬く、弾き返されるが何度も殴るのだが鉄パイプを奪われ拳げ句折り曲げられ腕を振るつただけで吹き飛ばされてしまった。

「コイツ……！」

オリオン・ゾディアーツははやと達を追い掛けようとしたその時。
【Cooperte】という電子音が三重に響き。

『ハアアアアアアアツ！……！』

オリオン・ゾディアーツの前に二人の仮面の戦士が現れた。

「ファイズ……！それにカイザとデルタ！」

「仮面……ライダー……！」

の字を模した仮面に黄色く輝く眼に胸部のプロテクターに流れる
ラインも のように見え、身体に赤いライン、フォトンストリーム
が流れた仮面ライダー・ファイズ、

を模した仮面に紫に輝く眼、黒い身体に胸部がクロスするようこ
黄色く輝くフォトンストリームが流れる仮面ライダー・カイザ、
を模した仮面にオレンジの眼、黒い身体に白いフォトンストリ
ムが流れる仮面ライダー・デルタが現れオリオン・ゾディアーツと戦
い始める。

「なんで仮面ライダーが……！」

「こ」の学校の七不思議で仮面ライダーが守つてるって伝説があるの

……

オリオン・ゾディアーツは負けると感じ撤退、ファイズ達はそれを
追い掛けその場から去った。

「こなた！ゾディアーツは？」

そこには「」が現れこなたに問う。

「ファイズ達が現れて逃げたよ」
「けんじ」は「そうか」と呟くと。

「なあアレの事、何か知ってるのか?」
「君には関係ない」

その言葉を返すと「けんじ」はその場から去りとある場所へこなたと共に向かった。

「ん?」

二人が校舎に入り向かった先は物置部屋でその中に入つたのを見る
と「けんた」も入るが二人は居らず、不自然なのが自然なのが分から
ないロッカーが並べて置かれておりそれを一つ一つ開けて中を調べて
いると最後の一つ、壁ぎわのロッカーを開くと中には掃除用具では
なく光輝く空間に繋がっていた。

「なんだこれ!?」

空間は通路みたく広がつており「けんた」はその空間に足を踏み入れた、
好奇心に身を任せて。

その通路の先には光の空間ではなく何か秘密基地のような設備が整
つた部屋がありそこにこなた、つかさ、かがみ、みゆき、けんじが
居た。

「まさかアンタが言つたゾディアーツが本当に現れるなんてね」「近い内に現れると思っていたがこんなに早く現れるとはな」

けんごはパソコンに向かつて話ながら何かの作業をしつつデスクに置いてある何か色とりどりなスイッチが四つ付いており真ん中にモニターのような物が付いた道具がケーブルに繋がっていた。

「フォーゼの力を使う時が来たかもしね」

「それはダメ！」と四人は同時に言つた。

「アンタ、体弱いのに変身したらどうなるかわかつてゐるのー？」

けんごは体が弱く『フォーゼ』なる力が危険なためもし使つたらどうなるかわからないのだ。

「フォーゼは私かかがみかみゆきさんが変身すれば！」

候補者として運動神経が抜群なこなた、運動神経、学力どちらとも平均値なががみ、運動神経と学力ともどちらとも平均以上なみゆきが居た。

「君達をそこまで巻き込むわけにはいかない」

だがけんごはこれ以上自分やゾディアーツに関わらせるわけにはいかないためその事を拒んでいると。

「うわあ～なんだこ～？」「

「げんちゃん！？」

げんたが部屋の中に居り宙に浮かんでいた、まるで無重力の中に居るみたいに、けんじはため息を吐いて何かのレバーを下ろすとげんたは床に落ちる。

「痛えーー！」

「君、まさか着いてきたんじゃ？」

「そりだぜ、なんせダチだからな」

「君と友達になつた覚えはないのだが？」

平行線な会話を繰り広げていると。

「あれを使えばいいんだな？」

けんじが見ていた道具、フォーゼドライバーに指を差して言つ、どうやら最後の方の会話を聞いていたようだ。

「君にアレは使っこなせない

だが渡す気はないらしくフォーゼドライバーからケーブルを外し持とうとしたが先にげんたに取られてしまい。

「やつてみなくちゃわからぬーぜ？」

「待て！」

げんたはフォーゼドライバーを持ったまま部屋から出て物置部屋に戻つてしまい追い掛けようとしたら躊躇ついて転んでしまった。

「げんちゃんは私が追うからかがみ達はけんじ見ててー」

こなたはげんたを追い部屋から出るとつかさが「私もー」と一緒に出ていった。

「俺がこんな体じゃなれば……」

けんじは悔しそうに呟いていた。

そして校内に戻るとファイズ達を振り切ったオリオン・ゾディア茨が生徒達に襲い掛かり破壊の限りを尽くしていた。ファイズ達はなぜ追えなくなつたというと邪魔が入つたのだ、ゾディアーツを従わせる組織の者達に行く手を阻まれていた。

「よーし」

げんたはオリオン・ゾディアーツの前に立つが。

「やばつ…………この使い方聞くの忘れてた！」

使い方がわからずどうすればいいかあたふたしていると。

「げんちゃん！それを腰に着けて！」

こなたとつかさがやってきて使い方を指示するとげんたはフォーゼドライバーを腰に着けるとベルトのようになる。

「それの四つのスイッチを右から押してって！」

言われた通りにオレンジ、青、黄色、黒のスイッチを押していくと【3・2・1】と鳴り響いていく。

「そして右のレバーを引いて変身！って言つて右腕挙げて」

ポーズまで指示をするとげんたはレバーを引いて「変身！」と言つて右腕を挙げると丸いリングが現れ上昇していくとげんたの姿は白を基準にし頭がロケットみたいな仮面で赤い眼をした姿に変わる。

「あれがフォーゼ！」

「うむ、宇宙のエネルギー、コズミックエナジーを使い戦う仮面の戦士、仮面ライダーフォーゼだよ！」

げんたは宇宙空間に存在する未知のエネルギーが詰まったフォーゼドライバーに装填されているアストロスイッチ、オレンジのロケットスイッチ、青のランチャースイッチ、黄色のドリルスイッチ、黒のレーダースイッチ、
それらに詰まつたコズミックエナジーで変身する仮面ライダーフォーゼに変身したのだ。

「なんか知らないけど……宇宙キター！」

両腕を挙げて叫ぶとフォーゼはオリオン・ゾディアーツに戦いを挑む。

「タイムンはらせてもらひぜー！」

オリオン・ゾディアーツに指を差して言つてから殴り校舎の外へ出る。

「ねりあああつー！」

外に出て回りを気にしなくてもいい事に豪快に蹴りやパンチを打ち込んでいく。

「こつやここやー！」

「げんちゃん！スイッチ使って！」

「スイッチ？」

試しに一番右のオレンジのロケットスイッチを使ってみた。

【ロ・ケツ・ト・オン】と鳴り響き右腕にオレンジのロケットのようなロケットモジュールが現れ後部の噴射口から火が吹きいきなりのため勢いに流されフォーゼはぐるぐる足を軸にし回る。

「田が回るーー！」

オリオン・ゾディアーツは回っているフォーゼに攻撃しようと接近したが迂闊だつた。

フォーゼはその状態でオリオン・ゾディアーツをパンチし殴り飛ばしうやくバランスを取れるようになり回転しなくなり走りだしてパンチを繰り出し殴る。

「ようやくなれきだぜ…………」

「飛んでから黄色のスイッチを押してライダー・キックで倒して！」

フォーゼはロケットモジュールで空を高く飛び左から一番田のドリルスイッチを押し【ド・リ・ル・オン】と鳴り左足に黄色いドリルモジュールというのが現れると左足をオリオン・ゾディアーツに向け突貫する。

「レバーを引いて！」

「なたが叫びフォーゼドライバーのレバー、エンターレバーを引くと【ロ・ケツ・ト・ド・リ・ル・コミット・ブレイク】と鳴り響き。」

「ライダーロケットドリルキィイイイイーク！…………！」

勝手に必殺技の名前を命名して叫びフォーゼ=げんた命名ライダーロケットドリルキックがオリオン・ゾディアーツを貫き。

「おつとつと」

ドリルは地面に刺さりフォーゼはそれで回るが何とか止まり、オリオン・ゾディアーツを背にする。オリオン・ゾディアーツは火花を散らしながら倒れ爆発した。

「やつたー！」とこなたとつかさが両手を挙げて跳ねて喜ぶとフォーゼはロケット、ドリルのスイッチをオフにしモジュールは消えた。

「ほんなもんやー。」

「貴様ああーつー」

そこによつやく体調がよくなつたけん」とかがみとみゆきが走つてきた。

「よつけんじ、あの怪物倒してやつたぜ」

「まだ、スイッチをオフにしない限りあのゾディアーツは現れるぞ」

「スイッチ？」と、さとうけんじはフォーゼドライバーのスイッチをオフにして、左のハンドルレバーを引くと、变身が解けた姿に戻ってしまった。

「これは返してもらいたいぞ」

けんじはフォーゼドライバーを持ち、その場を去った。

「スイッチ？」

「ゾディアーツは倒してから、そのゾディアーツに変身するためのアストロスイッチをオフにしないと、完全には倒せないんです」

みゆきがゾディアーツの倒し方について説明する。

ゾディアーツが現れた騒ぎにより、午後の授業は中止となり、下校する事になった。

「どうするか……」

その後の事だった、オリオン・ゾディアーツが暴れた事により、被害は現在は使われていない旧校舎にまで被害が及んでおり、その中にあつた棺桶みたいなものが蓋が開いた状態で開いてあり、そこに赤い右腕

が箱みたいな物を持つて浮かんでいた。

「使えるバカでも探してオーズに変身させてメダル稼ぐか……」

そう喋つていると旧校舎に入つてくる一人の生徒が。

「あれえ、ここから何か感じたんだけど氣のせいかなあ？」

そこにやつてきたのは未来で何か未知のエネルギーを感じたらしく一人で調べに来たのだ。

「ちようどいい、アレに取り付いてメダル稼ぐか

赤い腕は未来の方へ向かつて飛んでいく。
未来も気付くが遅く。

「お前の体、使わせてもらひや」

「うわああああああつ！……！……？」

「未来！？」

未来に何かあったとお母さんレーダーが反応したフェイドが居たとか。

青・春・変・身（後書き）

因みに三部構成です今は。

フォーゼ オーズ フォーゼ&オーズですかね？

その内アンクは新しい体見つけるかも……

次回【メダルと未来と謎の腕】

メダルと未来と謎の腕（前書き）

連続登校、今回は少しお色気が WWW

メダルと未来と謎の腕

「未来！？」

前回、未来が未知のエネルギーを感じ旧校舎へ向かい謎の腕に襲われ、フェイエトは未来と一緒に帰るために校門の前で待っていた。

「行つてみるか……」

心配になり校内に入ろうとしたら。

「あ、み……らい？」

未来がやつてきたのだが少し感じが違かつた。
金髪になっていたのだ、未来の髪の色は茶髪なはず、だがこんなに
すぐに髪を染める事なんてできないはず。

「おーい、未来ー」

と腕を振つて呼ぶが未来は無視して校内から出でてしまった。

「未来？ちょっと待つてよ未来！」

「……」

だが振り向かず歩いていき後ろから後を着いていく。

「なんで無視するの？ねえ？」

すると止まり。

「さつきから何だよ！？鬱陶しいなあ！」

突然未来は後ろを振り向いて怒鳴り鋭い目付きで睨む。

「お前……未来じゃないな」

フェイントも負けじと鋭い目付きで睨む。

「お前、魔導師か？」

「そうだ」とフェイントは未来を睨みながらバルディッシュを起動させる。

「一体誰だ？何を目的で未来を？」

「目的？目的、そ」「ハアアアアアアアアツ！……！」うおわっ！？」

言つ前にフェイントは問答無用で斬り掛かった。

「人の話は最後ま「問答無用おーっ！」わおっ！？」

避けようとしたら右腕を掴まれ。

「掴まえた！大人しく未来をかえ…………せ？」

だが掴んでいたのは旧校舎で未来を襲つた赤い腕で、未来本人は倒れていた。

「未来いいいいいいいいいいいいつ……………」

赤い腕を放り投げフェイトは未来を抱き起こす。

「大丈夫!? ねえ大丈夫未来! ?」

泣きながら問い合わせている次第に目を覚まし意識が覚醒する。

「未来……良かつたあーつ!」

「フェイトちゃん! ?」

むぎゅーと未来を抱き締め無事だといふことを喜ぶと。

「痛えな! 何すんだよ女!」

「貴様こそ、よくも未来を……………!」

異様な殺氣を放ち赤い腕だけどころか未来まで怯えつかひした目になってしまふ。

「あ、ごめんね未来」

よしよしと幼子を宥めるかのように頭を撫でる。

「それで貴様、何者だ?」

赤い腕に対しては睨み。

「俺の名前はアンク、見ての通り人間じゃ」「よくも未来を……
ゆるさん!」人の話は最後まで「問答無用!」「聞けよおー!」

フェイトは赤い腕アンクに斬り掛からうとした。

「フェイトちゃん、話は最後まで聞いてあげよつよ」

そう言わるとフェイトは一コ一コしながら同意しアンクの話を聞くために負け犬公園といつ天学の近くにある公園へ。

その頃、天学の理事長室では……

「どうどうグリードが復活したか……ハッピーバースデイ！」

部屋にはオレンジの派手なスーツを着た男性が泡立て器を使い生クリームを作っていた。

「ゾディアーツの騒ぎで旧校舎からグリードが復活したようだね後藤くん！」

「はい、ライドベンダー隊からの報告でオリオン・ゾディアーツは力を確かめるべく旧校舎の内部を破壊したようです、鴻上理事長」

派手なスーツの男の名は鴻上光生、この天学の理事長である、鴻上に話し掛けた男の名は後藤進、この天学の高校一年であり鴻上から強い信頼を得ておりライドベンダー隊なる部隊の隊長をしている。

「そしてグリードと同時に復活するのが……オーズ、オーズの適応者がすぐに見つかるのを祈るつではないか！」

鴻上は生クリームをスポンジケーキに塗つていきた「レーショ」ンしていく。

「後藤くん、引き続きグリードのアンクの監視を、誰がグリードになるか見届けてくれたまえ」

「わかりました」

進は部屋から出でていくと鴻上は隣の部屋へ入るためのドアを開け中に入つていった。

「俺はグリードつて欲望の塊、セルメダルと欲望が濃いコアメダルでできたお前達から見れば化け物だ」

アンクは銀色のセルメダルと枠が金で平面に鷹の絵が描かれ赤いコアメダル、タカメダルを出して説明。

「このセルメダルを人間に投げ入れれば欲望の塊の化け物、ヤミーが生まれその人間の欲望のまま動く」

「なら君もヤミーができるの?」

「いや」と否定。

「俺はコアが少なくてヤミーを生む力もなくこの右腕動かすのがやつとだ」

「なら今この場で!」

フェイトは未来の仇と言わんばかりにバルディッシュで斬ろうとするが止められ落ち着きを取り戻す。

「僕の体をどうするつもりだったの？」

「あ？他のグリードからメダルぶん取つて稼ぐつもりだったんだよ

他のグリードとこうのに一人は驚いた、アンク以外にも居るとは思わなかつたからだ。

「そろそろ動きだしているだろ？な

アンクは回りを見るように腕を動かしていると悲鳴や爆音が聞こえ道路を見るとそこには人型だが明らかに人間ではなく、腕がカマキリのような鎌となり体が緑色のカマキリヤミーが車等を破壊していった。

「アレがヤミーだ、コイツはウヴァのだな」

「見つけたぞアンク！メダルを返してもらおうか！」

「嫌だな、返して欲しければコイツ倒してからにしろ

「私！？」

フェイトに指を差して言つとカマキリヤミーは襲い掛かる、バルディッシュで鎌攻撃を受け止めるが魔導師姿に。

「勝手な事を……！」

「人を守るのが魔導師なんだろ？回りを見てみろ

回りはカマキリヤミーにより怪我をした人々が居り倒れているのも居た。

「言われなくたつて！」

フェイトはカマキリヤミーと戦い始めるとアンクは細長い四角い箱みたいなオーブドライバーという物を未来のブレザーから出す、乗つと/or>ていた時にポケット等に入れておいたみたいだ。

「これを腰に着ける」

未来は戸惑いながらも腰に装着、するとベルトみたいになり右側に丸いオースキヤナーと左側にはメダルを収納するオーメダルネストが付いていた。

「ここの三つのメダルをここに右から赤、黄色、緑と入れていけ」

オーブドライバーのバックルの三つのくぼみにタカメダル、黄色で虎の絵が描かれたトラメダル、緑で飛蝗の絵が描かれたバッタメダルを右から入れていくとバックルは傾く。その行いに気付いたカマキリヤミーは。

「おいやめる！ アンクに乗せられるな！ 大変な事になるぞー！ うわおう！？」

親切に止めようとするがフェイトに斬り掛けられそれどころではなかつた。

「コイツをスライドさせろ」

オースキヤナーを渡すと未来の田付きは変わりオースキヤナーでバックルをスライドさせコアメダルを読み込ませていく。

「変身！」と思わず叫ぶと【タカ！ ブラ！ バッタ】とコアメダルの

種類の名前が響き【タツトツバ！タトバ！タツトツバ！】と何か
歌のようなものが流れ未来の姿は変わる。

黒いストーツを基準に赤くタカのようで緑色の眼の仮面タカヘッドに
胸部にはオーラングサークルというメダルのような鎧に上からタカ、
トラ、バッタと読み込んだコアメダルの絵となつており腕は黄色い
トラーム、脚には緑色のラインが流れたバッタレッグとなつた、
仮面ライダーオーズ・タトバコンボに変身した。

「仮面ライダー！？」

「あ……！」

フェイトは驚くがカマキリヤミーは残念そうに嘆く。

「え？ 今……タカ、トラ、バッタって歌が「
歌は気にするな、それはオーズ、どんなものかは……戦つてみ
ればわかる」

オーズは「よし」と気合いを入れると走りだしカマキリヤミーにパンチを食らわした。

「スゴい！スゴいよこのオーズって言うのー！」
「どうなつても知らないぞ！」

カマキリヤミーは鎌で斬り掛かるがバッタレッグが飛蝗のような脚
に変化しジャンプして後ろへ避けるとトラームからトラクロードと
いう爪が飛び出しバッタレッグの力を使ってジャンプしカマキリヤ
ミーに切り掛かる。

「セイヤーツ！」

「ぬあつ！？」

体を切り裂かれ火花を散らすと同時にセルメダルも飛び散る。

「『』の怪人メダルでできるのか……」

「コイツ……人が親切にしてやつてるのに……もう知らないぞ！」

カマキリヤミーは完全に怒り鎌でオーズを斬りダメージを『』え吹き飛ばす。

「うわあーっ！？」

「未来！貴様！」

オーズが傷付いた事に怒り、カマキリヤミーに斬り掛かったが。
「もう貴様の動きは見切った！」と叫び鎌を振るい斬撃をフェイトに食らわす！

「フェイトちやん！」

仮面の下、目を瞑る、頭に血塗れのフェイトが浮かび恐る恐る目を開くと。

「アレ？」

血は飛び散つておらず代わりにバリアジャケットの切れ端が散らばつていた。

「いや〜ん

「おかしいな……バリアジャケットは貫通したはずなのだが……

……

血塗れではなく代わりにバリアジャケットがズタズタに切り裂かれて肌が露出したフェイドが座り込んで色々大事な所を腕やバルディツシユで隠していた。

バリアジャケットがカマキリヤミーの攻撃から守り人体までには攻撃が通らなかつたらしい。

「未来」、バリアジヤケット修復するまで時間掛かりそうだから、
後お願ひい

バリアジャケットは着ていなくても肌は魔力で守られているため今学生服に戻るわけにはいかない、うる目になりながら頬みオーズは頷く。

カマキリヤミーは目の前に居らず回りを見渡すと影ができ上を見上げると太陽を背にしたカマキリヤミーが鎌の先で突き刺そうとしていたがオーズは反射的にオースキヤナーでコアメダルを再スキヤンすると【スキヤニングチャージ】と鳴り響きバッタレッグが再び飛蝗みたいになり、

「ハアアアアアアアア
……………！」

そしてバッタレッグの力を使いジャンプしかマキリヤミーに突撃。

トラクローキーを前に向けカマキリヤニーを切り裂く。爪をクロスし必殺技コアチャージクロスを炸裂。

突き刺すように切り裂くとカマキリヤミーは断末魔を上げて爆発、セルメダルが数枚散らばる。

「ふう〜」

オーズは道路に着地するとバックルを水平に戻すと変身が解ける。

「なんか使い方わかつちゃつた」

フォーゼとは違いオーズドライバーが変身者の脳に直接使い方を教えるようだ。

「お疲れ様、大丈夫だつた?」

戦いが終わつた事により学生服に戻り駆け寄るフェイト。

「あれ? アンクは?」

さつきまでいたと思われていたアンクは居らずすると倒れていた一人の天文学の制服を着た焦げ茶色の髪の毛で八重歯の男が立ち上がる、だがその男は微かに口を動かしていた。

「まさか……今度はその人に!?」

二人はすぐに理解できた、倒れ気を失つた人間に乗り移つた。

「この人間は死にかけていた、別にいいだろ」

アンクが乗り移つた男は右側の髪の毛の部分が金髪となつた。

「ちい、 雨は無用だ、 すぐに行へや」

アンクは堂々とその体を使いその場を去るために歩いていく、 未来とフロイトはその後を追つていった。

れいが、 アンクが乗り移った男が口を動かし聞こえた。 未来の言葉は一つの名前だった。

「みわく……あやの……」 と呟いていた。

メダルと未来と謎の腕（後書き）

はい、やつひやこました、ニヤニヤが……フェイトが悪いんだ、あんな色気ぶつまけてるバリアジャケットを着てるからいつなるんだよ……

因みにフェイトにはウエイトと言つてもらおうかと。

因みにオーズのタトバ以外の持ちメダルはウナギとチーターです。鴻上さんが理事長で後藤さんは高校二年www

次回【天然とヤンキーと宇・宙・上・等】

天然とヤンキーと宇・宙・上・等（前書き）

今回長いっス。

「歌星い～！」

「二二二はいつから君達の溜り場になつた？」

ゾディアーツが暴れた次の日の朝、
けんじやこなた達が使つているある場所にある施設の部屋、そこに
かがみのクラスメートの焦げ茶色のショートヘアに八重歯が目立つ
女子生徒の日下部みさおとオデ「が目立つ長い髪の毛で金髪っぽい
女子生徒の峰岸あやのが居た。

「いいじゃんか～私達友達だろ～」

女には優しいのか、けんじは否定する事無く溜め息を吐き用件聞く
こと。

「それで一体何があつた？」

「兄貴が帰つて来ないんだよ～」

「兄貴…………日下部みこと先輩か？」

その名前を言つてるとみさおは頷く。

日下部みこと、この天高の一年でありますみさおの兄、そしてあやの
彼氏でもある。

「うん、昨日負け犬公園の前で待ち合わせしてたんだけど何か事故があつたみたいで居なかつたの、待ち合わせ場所帰るならメールか電話してくれるはずなのに、心配になつてみさちやんに連絡したら」

「帰つて来てないつてことわ」

けんじはさつそくパソコンを使い昨日の負け犬公園での事件の詳しい内容を調べると出たのはカマキリの化け物、歌が鳴り響く仮面ライダーと出てきた。

「まさか……兄貴その戦いに巻き込まれて！？」

「だけど病院に運ばれていたら日下部の所に連絡が来るはずだ……

… F組行くぞ」

けんじは立ち上がり校舎へ戻るつとまるがけんじのクラスはF組ではなくその前のE組である。

みさおとあやのはかがみと同じE組の前のD組である。

「なんでF組？」

「この戦いに一人の魔導師が関わつている、その魔導師に会えればわかるだろ？」

F組に居る魔導師、それは……

「昨日の騒ぎ？」

「ああそうだ」

F組にはフロイトと未来が居り、やはりいつも通り親子展開が。

(昨日のアレだよね)

(うんアレだね)

念話で会話し田を合わせていると。

「フュイト・テスタークッサ、昨日負け犬公園で怪人と戦つただろ?
そこで田下部みこと先輩を見なかつたか?」

その名前を聞いた瞬間フュイトはビクッとなつた。

(もしかして……アンクが取り付いたのって……)

察しがついた。

(未来、今日アンクは?)

(一人で出回つてゐる、メダル探すとかつて)

(あの状態で会わすわけにはいかないからね)

(わかつてゐる)

しばし念話で会話していると。

「それでどうなんだよフュイト!」

「あ……見なかつた……かな?」

それを聞いてがつかりしながらみわおとあやのは自分の教室へ戻りけんじも戻つた。

(フュイトちやん……)

(田下部先輩を何とか助ける方法考えよ?)

(うん)

一人は軽く念話するとホームルームが始まりその話はまた後でになる。

その頃アンクはメダル探しのため海鳴市を歩いていたが何か自分で珍しいものが目に入り未来から現金は渡されていたためそれで買った、それは……

「ツー、これは……！」

アンクが買ったもの、それはアイスキャンディだ、それを一口舐めた瞬間アンクの脳（正確にはみこと）に衝撃が走る。

（もつと買おう）

と再びアイスキャンディを買いにスーパーに入つていた。
それを監視するものが一人。

「やはりか」

それは進で学生服ではなく黒いライダースーツを着てバイクに乗り双眼鏡を使い覗いて見ていた。

（田下部……お前が巻き込まれるなんて）

アンクが動き出したため進は黒いバイク、ライドベンダーのアクセルを回し走りだし追跡を開始した。

昨日（二話前）ゾディアーツと戦ったげんたはオリオン・ゾディアーツに変身するためのアストロスイッチの使用者を探すため授業をすっぽかして校内を走り回り情報を求めていた。

（絶対見付けてけん）を認めさせてやる！）

フォーゼとなり戦つたがスイッチをオフにし損ねたためんごに自分の事を認めさせるためにアストロスイッチの使用者を探していた。だがやはりこれと言つた手掛けりがなく校舎を歩いていくと。

「君は？」

とある教師に見付かり逃げよ出した。

「何も逃げる」とは……」

教師……沖一也はげんたの後をゆっくり追つた、自分もゾディアーツの事を知りたいからだ。

そしてげんたは物置部屋に入りあの空間に入りビコにあるかもわからぬ施設に入った。

「……」まで来れば……」

取り敢えずゾディアーツの事を調べるためパソコンのキーボードを分けもわからずめちゃくちゃに操作していると何か窓みたいなもの

がスライド、特殊なガラスが付いておりそこから見えたのはなんと青く輝く美しい星、地球だつた。

「もしかして……地球！？」

驚いていると。

「いつ見ても、月から見る地球は美しいな」

「げつ！」

そこに一也がやってきてしまった、振り切つたと思ったのだが、だがそれよりも。

「月！？」

その単語に驚きを隠せなかつた。

「せつ、月には月にある月面基地みたいだね」

一也は月の月面基地のシステムを知つてゐるかのよつと語つた。

「月はラビットハッチ、17年前に事故でその月面基地の隊員達は全員死亡」

その後の事故の調査に俺も参加し、だが何も分からなかつた

「先生が、宇宙に？」

一也がなぜこの月面に来たかは理解できなかつた。

「教師になる前はアメリカ国際宇宙開発研究者の科学者だつたんだ、だけどなかなか宇宙に行けなくて、

初めての宇宙がいの月面基地の調査だったんだ

一也は昔を懐かしむよつて語るがげんたは疑問に思つた、いや、誰もが疑問に思つことだ。

「だけど先生、あまり老けて……」

そう、一也の外見は年齢に似わず、二十歳を後半過ぎた顔付きだつたのだ。

その事についてもつとよく聞くひつとしたひ。

「げんちやん！？それに沖先生！？」

こなたがやつてきたのだ、ラビットハッチが月面にあるのなら物置部屋から円まである光の通路が繋がつてゐる事になる。

「授業始まつてゐるのに来ないからびいに居ると思つたら……！」
は秘密なんだよ？」

だが先ほども言つた通りこなたにつかさ、かがみとみゆきやみさおとあやのの滝り場になつてゐる。

「それなのにまさか先生まで…………！」

教師にこれがバレるのがどれほど大変かは想像したくなかったが。

「大丈夫さ、言わないでおくから、それよりやつぱ地球は綺麗だね

再び窓の方を向いて地球を見る。

「人類は長い間エネルギー問題に悩まされ続けていた、

いくら魔力があつてもその問題は解決されずにいた、だけどもしこの月で開発ができる、進めば電力、鉱石、あらゆる資源の供給が保証される」

げんたにはちんぶんかんぶんだつたがこなたはその話を知っていた。だがその内容はまだ仮設の段階であるが一也は話続けた。

それを言つてみると、

「それが現実だとしたらワクワクしない?」

それが実現したらエネルギー問題から解放されてそしてさらなる宇宙進出

一也は夢を叶える事に全力になる子供のような目で輝いていた。

「そしていつか太陽系も超えて外宇宙に……だから俺はS-1に……おつとこれは……だけど君ならS-1の意味、わかるよね?」

途中で止めたがこなたならそのコード名の意味がわかると呟りそれ以上は話さなかつた。

「S-1って……沖先生はまさか……ドグマやジングルグマから地球を救つた!」

ドグマ、ジングルグマ、その名前はげんたにも聞き覚えがあつた、その一つは歴史の教科書にも載るほどのものでその一つの組織を倒したもののが前の開発コードがS-1だった。

「さて、君達は早く教室に戻つて、授業が始まるとから」

一也はラビットハッチから校舎へ戻った。

「あの先生があんなにすごい人だったなんてな」

「うん……げんちゃん、ちょっと一緒に来てくれる?」

「え?」

数分後、二人は宇宙服に着替え月面に立ち歩いていた。

「よくこなたに合う服あつたな」

「失礼だね~」

そんな会話をしながら歩いていると巨大なクレーターがあつたがそれは人為的な意志でできたものだった。

「けんごのお父さん、ここで死んじやつたの」

けんごから聞いた話を静かに語り始めた。

ラビットハッチではけんごの父親がコズミックエナジーについて研究をしていたがアストロスイッチを悪用しようとするものにより殺害されてしまつたことを。

「今のがんちゃん、なんか変だよ?」

認めさせたいとかライバル意識が一番に来てて本当にはんごと友達になりたいか怪しいよ?」

その言葉に反論できなかつた、その通りだからだ。

「宇宙飛行士はね、絶対信頼ができるパートナーが必要なの、げんちゃんにはけんじのサポートをしてほしいの、それに……けんじはお父さんが残したアストロスイッチやゾディアーツを止めるのが仕事だつて一人で抱えてるの」

そんな重いものを背負つてゐる、そう感じるげんたは考えが改まり。

「こなた、けんじの所に連れていくてくれ

「もちろん」

二人はラビットハッチに戻り校舎へ戻つた。

「まさか授業が午前中だなんて」

「アメフト部が試合ある日は絶対午前中で終わつてほとんどの生徒が応援に行くの」

未来とフェイ特は海鳴市に戻りうろついていたが後ろから着いてくるのが二人居た。

(() の状態でアンクと会えない !))

とか思つていた矢先に。

「どうしたんだよお前ら?」

アイスキャンディを買こまくつたアンクが来てしました。

「アンク！今来て」「兄貴！」「あー……」

電信柱の陰からみさおとあやのが出てきました。

「一体何してんだよー髪まで染めて！」「心配したんだよ！」

二人はアンクに近寄ると。

「あーあ、この体の妹とその女か」

その発言にアンクに詰め寄るが未来とフェイトに引き離され数分後、落ち着きを取り戻しわけを聞くこと。

「兄貴に腕の怪物が乗り移つて！」「もし離れたら命の危険があるうー！？」

フェイトは頷く、話を聞くと一人は力が抜けたような姿勢になる。

「それじゃみ」とさんはどうなるの……」「傷が自然に回復して意識が戻るのを待つしかない……もしくはアンクを離して病院に送るか……だけどそんな事させてくれる分けないし……」

何かいいアイデアないか考えていると未来は。

「僕が……日下部先輩と一心同体になつて自分の意識を封印して代わりに日下部先輩の意識を持つてくれば……」「……」

「お前、何…………」

みさおとあやのことは意味が分からなかつた、だがフェイトにはその意味が理解できた、したくないのに。

「そしたら未来が消える」と……

自分の意識を封印しみことが生れる、実質未来の存在が消えることになる。

「もう嫌なんです……手が伸ばせるのにしないのが……それをしてもう後悔したくないんです」

過去に何かあったのか、それは未来にしかわからない。

「輝くん？」

すると後ろからアンクが肩を叩き。

「未来、マリーだ」

それだけ言つと走りだし未来は後を追つた、三人も着いていくことに。

「これだけでも使いこなせないと……」

けんじはどこの土地にある荒れ地で白いオフロードバイクに乗り、その運転を練習していた。

そこに一台の自転車が横を並び走る。

「なんだまた君か」

「けんじーお前の親父の話を聞かせてもらつたー。」

「こなたか」とけんじは咳き走り続ける。

「それで同情で一緒にゾディアーツを倒そうとしても?」

「そうじゃねえ!一人で背負い込む事はないんだ!」

「誰かと一緒に背負つてその重荷を軽くしようつてことー。」

だからお前をサポートさせてくれ!そしてフォーゼにさせてくれー!」

端から見れば同情するよりも聞こえる、だがげんたは同情ではなく心の底からけんじを手伝い、支え、友達になりたい、その思いから言つた言葉。

そのことを感じバイクを停めるとげんたも自転車を停める。

「水月……」

「やつと名前呼んでくれたな、名前だけだな」

遠くからこなたとつかさ、かがみとみゆきが見ていた。

「仲良き事は美しき事かな?」

「さうね、あの一人が仲良くなるにはまだまだ先の話だと思つけど」

そこにはかがみの携帯に着信が入り通話に出てその相手の話の内容を聞き。

「それ本当！？」

「どうかしたのお姉ちゃん？」

携帯を閉じしまうと。

「ゾディアーツの正体、知つてゐるって子から電話があつたの、知りたければ風都第一スタジアムに来てだつて」

「確かにこはアメフト部が他校と試合を……」

四人はげんたとけんにその事を伝え一緒に第一スタジアムへ向かうことに。

「ここだ」

アンクが来た場所はその風都第一スタジアムの近くにある銀行で、その中で動物などの ヤミーになる前の白ヤミーが暴れ札束や金品を強奪し吸収していた。

「すごい欲望だな、あれならまだ育つ」

「そんな事言つてないでメダル貸してください！」

「ダメだ、もつと太らせたら、豚ももつと太らせてから食つのが人間にとつては美味いんだろ？」

未来にコアメダルを要求するが拒み後ろにフェイト達三人が。

「あ、だがお前、人間じゃなかつたな」

その言葉に衝撃が走つた。

「お前に取り付いた時にわかつていた事だが……お前も俺と同じような奴がなんで人間を守るんだ?」

その問いに何も答えられずにいたが。

「未来は、化け物なんかじやない」

「フェイト?」

フェイトはものすごい目付きでアンクを睨む。

「未来は貴様みたにに欲望塗れじやない」

「へ、意志があるものは全員欲望を持つてゐる、お前だつてコイツにどんな欲望を抱いているんだろうな」

「黙れ!」

フェイトとアンクが対峙していると第一スタジアムにげんた達が到着、入口には一人の女子生徒が居た、黒い長い髪の毛で何か不気味なオーラを放つ天川ともこだった。

「君か」

ともこが頷くとげんたは詰め寄つてゾティアーツの事を聞き出そうとしたがかがみに拳骨を食らつ。

「最初は自信無くて教えなかつたんだけど調べてみたら確信がついて」

「なんで協力してくれたんですか天川さん？」

「だって」

「げんたを見て。

「IJの人があ面白そうだから」

「げんたとけん」以外は「確かに」と頷きながら咳きとも「はオリオン・ゾディアーツのアストロスイッチの使用者の元へ誘う。

「IJIか」

そこに一也がやってきて中に入るげんた達を見ていたら近くの銀行から巨大な力マキリみたいなオトシブミヤミーが現れた。

「また新しい敵……」

フェイントとアンクが対峙していると未来が。

「なら、僕があなたを倒し日下部先輩を解放して体の中に入つて自分を封印する！」

「それはダメだ、絶対にな」

なぜこうにもダメを押すかはオーズは一度変身すると最初に変身した人間にしか使用できなくなる。

みさお達も未来の事は知っていたがここまで意志が強い男とは知らず驚く、しばしアンクと睨み合っていると折れたのか三枚のコアメ

ダルを未来に渡す。

「勝手にしろよ」

「後、人の命よりもしメダルを優先させたら僕は構わぬ君を倒し曰下部先輩を救う」

「ああ！わかつたからさつさと行け！」

未来は走りながらオーズドライバー腰に着けメダルを挿入していくバツクル傾けるとオースキャナーを持ちスライドさせメダルを読み込ませると「変身！」と叫び【タカ！トラ！バッタ】、そして【タツトツバ！タトバ！タツトツバ！】と響き未来はオーズ・タトバコンボに変身しトراكローを開幕しオトシブミヤミーに立ち向かった。

「輝が…………仮面ライダー…………」

「私も、行かなきや」

フェイトはバリアジャケットに着替えバルディッシュを持ち飛び立つとアンクは近くで戦いを見るために歩きだしみさおとあやのも着いていく。

スタジアムの通路ではやとアメフト部の部員(三浦がもめていた。

「貴様、キングの俺にそんな口聞いていいと？」

「上文字さん、貴方はいつもそうだ、いつも人を見下すような態度を取つて……だけもうこれも今日でお終いだ、これさえあれば」

三浦はアストロスイッチを出すがそれはどこか不気味で丸く田玉みたいな感じだったが【ラストワン】と鳴り充血しているような感じに。

「そんなオモチャで何ができる?」

はやとは呆れ歩こうとする、三浦はアメフトが好きなのだがボールにすら触らしてくれずやり場のない怒りに見舞われていたがある日アストロスイッチを渡されたのだ。

「待て!」

そこにげんた達とともにこがやつてきた。

「三浦!それを渡すんだ!」

「またお前がトラッシュ、そしてギークにその他

その他は呼ばれて面子以外だつ、はやとは会場へ向かおつとした
ら三浦はアストロスイッチを起動させてしまった。

「うわああああああつ…………」

三浦はオリオン・ゾディアーツに変身するが三浦の体は放り出され繭に包まれたような状態でオリオン・ゾディアーツは棍棒と盾を持つてパワーアップしていた、

これにははやともびりげんたの後ろに隠れる。

「なんか変わつてねーか?」

「あれはラストワンの形態、パワーアップしていくて早く倒さないと

三浦は人間に戻れなくなるぞ」

けんじはフォーゼドライバーをげんたに託した。

「頼んだ、水月」

「ああ」

フォーゼドライバーを腰に着けるとこなた達は後ろへ下がつて角に隠れ頭を出して並ぶように覗く。

げんたは左手でロケット、ランチャー、右手でドリル、レーダーのスイッチを押し【3 . . . 2 . . . 1】と鳴りエンターレバーを引き左腕を軽く曲げ「変身！」と叫び右腕を上げリングが現れそれが

上に上がるとフォーゼに変身。

「宇宙キターッ！」と叫んでから「タイマンはりせてもひづぜ」
と言いオリオン・ゾディアーツに挑む。

「君達、俺は何も見なかつた、後はようじく

はやとは見てみぬふりをしごろつとしたら突然天井が抜け尻餅を付
き上を見上げるとオトシブリヤミーが居た。

「アレもゾディアーツ！？」

「いや、違う！」「

会場に居た人々はパニックになり逃げ惑つ。

「セイヤーツ！」

「ハアアアアツ！」

オーズのトラクロードとフロイトのバルティッシュがオトシブリヤミ

ーを切り裂くがいいダメージはあまりだつた。

「フォイトが戦つてゐるの？」

「そつみたいね」

フォーゼはオリオン・ゾディアーツを外へ連れ出す、こなた達は追つて外へ。

会場はまだ避難できておらず、チア部も応援に来ていた。

「一体何よあれ！」

みうは怒りながら逃げているとスタジアムの天井が崩れ瓦礫の下敷きになりそうになり悲鳴を上げ死を覚悟すると【タカ！トラ！チーター！】と響くと痛みが全然感じずむしろ優しい温もりを感じ恐怖で閉じていた目を開くと視界に。

「大丈夫ですか！？」

オーズのタカヘッドの仮面が目に入った。

オーズは脚が素早さに優れたチーターレッグという黄色いラインが流れる脚、タカトラーテーとなつており

「え、ええ……ありがとう」

みうはお姫様抱っこされており降ろされ立つと

「ちょっとー貴方の名前は！？」

「あ、ひか……じゃなくて、オーズ、仮面ライダー オーズ！」

オーズはオトシブミヤミーに向かつて走りだした。

「オーブ……」

みうの頬は少し赤かつたとか。

「水月、ここで倒したら被害が出る」

ラストワン形態となつたオリオン・ゾディアーツを倒すと爆発でストージアムにも被害が及び逃げ遅れた人々が大変なことになつてしまふ。

「それじゃどうしたら…」

「宇宙でロミットブレイクすると同時にスイッチを奪つて切れ！」

「宇宙はともかくどこにあるんだよ！」

だがアストロスイッチはどこにあるかわからず。

「俺はお前が指示した通り戦う！」

「水月……」

「だから指示してくれ！」

その言葉を聞きけんはノートパソコンを開き小型のメカ、バガミールのカメラを通してオリオン・ゾディアーツを調べる。

「早くしてくれ！」

フォーゼはオリオン・ゾディアーツの猛攻をしのぐ。一方、タトバコンボに戻りオーツもオトシップミヤミーに苦戦していた。

「どうすれば……」

そこに進が長い箱を持ち現れた。

「ある人からの誕生日プレゼントだ、受け取れ」

「え、あ、ありがとうございます……」

取り敢えず受け取ると蓋を開け中には大剣メダジヤリバーが。

「それにセルメダルを三枚入れろ」

言われた通りにセルメダルを三枚挿入。

「このバイクもプレゼントだ、そしてこれも」

進は黒い自動販売機にサンプルは赤と青と色とりどりな缶が並んでおりセルメダルを挿入しスイッチを押していくと赤い缶や青い缶が出てきて進はそれを取り蓋を開けると【タ・カ・カン】、【タ・コ・カン】と鳴り赤い缶のタカカンはタカみたく、青い缶タコカンはタコみたい変形すると自動販売機からタカカンやタコカンが大量に出てくる。

「よーしー。」

オーツはライドベンダーに乗り走りだすとタコカンが通路を作り空を駆けフェイトに近付く。

「フライタさん！」

「未来！」

フロイトはライドベンダーの後部に乗りオトシップ//ヤリ//ーの下を潜り、するとバルティッシュの刃が伸びる。

【Jet Zamber】

「撃ち抜け雷神！ジエットザンバアアアアアアーッ！！！！！」

バルディッシュの刃を上へ上げそのままオトシブミヤミーを真つ二つに切り裂き下を潜ると横を向きライドベンダーは停車、メダジヤリバーにオースキヤナーをスライドさせ【トリプル！スキニングチャージ！】と鳴り響き刃にエネルギーが貯まっていく。

「ハアアアア…………セイヤアアアアアアアーッ…………！」

メダジヤリバーを横に振るい必殺技オーブバッシュで遠くにいながらオトシブミヤミーを横に空間ごと斬ると敵以外空間は元通りになりオトシブミヤミーは爆発しセルメダルが辺りに散らばった。

「やつたー！」

オーズが勝つたのをアンクは見て。

「もしや、力能はあるみたいだな」

ぼそつと呟いていた。

「わかつたぞ！胸の辺りにある！」

「オッケー！どうやって宇宙に？」

すると黄色い人型作業用ロボット、パワーダイザーが現れ。

「奴をランチャーのミサイルの爆発で宙に浮かせろ！」

「ランチャー、これだな」

ランチャースイッチを押すと【ラン・チャ・ー・オン】と鳴り右足にロケットランチャーが現れミサイルを放つが違う所に当たる。

「レーダーでロックオンしろ！スタジアムを破壊する氣か！」

だがスタジアムはボロボロであまり破壊しても目立たなかつた。

「そうなの？」

レーダースイッチをオンにし左腕にパラボラアンテナが現れそれをオリオン・ゾディアーツに向け狙いを定めてからミサイルを放ち爆発により宙に吹き飛ぶ。

フォーゼはバイクに乗りパワーダイザーは変形しロケットの発射台となりバイクと合体する。

「これ、打ち上げるのか！？」

「そうだ」

カウントが終わるとバイクはフォーゼを乗せたまま飛び出しオリオ

ン・ゾディアーツにぶつかるとそのまま宇宙へ飛んでいく。

「よく飛んだね」

「すごいですね」

「あれ？ 敵は？」

オーツとフロイト、更にみやおとあやのもやってきた。

「眼下部に峰岸！」

「あ、柊ちゃん」

「オーツ、柊！」

大気圏を越えて宇宙に着くとオリオン・ゾディアーツは吹き飛びゅつくり流れていきフォーゼはロケットモジュールとドリルモジュー
ルを使う。

「よし！」

そしてエンターレバーを引きつリットブレイクを発動すると

「ハツ！」

隣に銀色の体に赤い眼とマフラーのスズメバチをモチーフとした仮面ライダースーパー1が現れた。

「もしかして……」

「行くぞ、げんた！」

はい！」

一人のライダーはオリオン・ゾディアーツに突貫。

「ライダーロケットドリルキイイイイイイーク！－！－！－！－！」
「スーパーライダー！月面キイイイイイイーク！－！－！－！－！」

一人の仮面ライダーの必殺技が炸裂しオリオン・ゾディアーツを倒すとフオーゼの手にはアストロスイッチが、オフにするとスイッチ 자체が消えるがそのまま大気圏に突入し地上へ落下していく。

「うわあああああああつ！－！－！－！－！？」

どうすればいいかと何かアストロスイッチを探していると一つのアストロスイッチが、レーダースイッチに入れ替えオンにすると左腕にパラシュートが現れ落下がゆっくりになっていく。

「ふう」

地面に着地すると変身を解いた。

「なんとかなつたぜ」

けんごに伝えると近くにスーパー1が降りる。

「仮面ライダー」……………スーパー！「

「ドグマとジンドグマを壊滅させた伝説の一.」

上からこなた、かがみと喋るとスーパー1は変身を解く。

「沖先生！？」

スーパー1に変身していたのは一也だった。

「よくやったなげんた」

「ああ」

三浦がふらふらした足取りでスタジアムから出てきてげんたは「お前ともダチになるからな」と宣言する、三浦は嬉しかったのか笑みをこぼした。

「兄貴の体なんだけど、もう少しっこよ

みことの体についてだがみさおとあやのが話し合った結果、ヤミーと戦うためオーズは必要だと想い、それに未来の存在が消えるのを嫌と感じたのもあるからだ。

「すみません、必ず日下部先輩を助ける方法見つけます

未来はしょんぼりしながら言つ。

「だけど輝つて一体何者なんだ？」

「そうだよね、輝くんつて何者？」

「僕は…………ウルトラマンメビウスです！」

「口笑いながら自分の正体を明かしたのだった。
それに啞然としていたのは言うまでもない。

「そして次の日」

「水月、これはなんだ？」

ラビットハッチの壁にフォーゼの絵が描かれた旗が飾られていた。

「仮面ライダー部の旗だ、これからこの学校の平和を守る、それが

活動内容だ、そんでもって部員一号は「」なただ

「いや、楽しそうだから乗っちゃつた」

「因みに僕も部員でーす」

未来とフェイントもラビットハッチに居り。

「そして俺が顧問」

「也も居た。

「水月、やはりドライバー返せ」

「嫌だ」

「返せ！」

二人はフォーゼドライバーを巡り中を駆ける、その様子を笑つて見

ていたのだつた。

天然とヤンキーと宇・宙・上・等（後書き）

スーパー1が顧問！

次回【蘇る光の巨入】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8413w/>

ヒーロー×アニメ物語

2011年10月9日15時37分発行